

千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書



昭和 61 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

千葉市小食土廃寺跡確認調査報告書

昭和 61 年 3 月

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県下には、国分寺跡をはじめ40数か所にのぼる古代寺院跡の所在が確認されています。これらの寺院跡は、奈良、平安時代における地域の歴史・文化を解明する上で重要な遺跡であります。発掘調査により内容をは握できる例は数少ない状況です。

千葉県教育委員会では、規模・時代等を明らかにして、その保存策を講ずる資料とする目的で、国庫補助事業として昭和55年度から確認調査を実施してきました。

本年度は、千葉市小食土町に所在する小食土廃寺跡の調査を実施しました。その結果、掘り込み基壇を中心として、周辺に掘立柱建物群等が付属している実態をは握することができました。この基壇の周囲には溝状の掘り方が巡ることから、基壇の周囲を厚板で飾っていたものと想定され、県内では数少ない例として注目されます。また、出土した鏡瓦（二十四葉単弁蓮華文）及び字瓦の一部（均整唐草文）は、上総国分寺の創建時所用瓦と同範の可能性が高いことが明らかとなるなど、千葉県の古代寺院跡の解明にとって、重要な資料と課題を提供し、大きな成果を得ることができたと考えております。

このたび、その発掘調査の成果が調査報告書として刊行される運びとなりました。この報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のために広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終わりに、調査に当たって、多大な御協力をいただいた千葉市公園建設課、昭和の森事務所、千葉市教育委員会と地元の皆様、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員の方々の御労苦に対し、心から感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

千葉県教育庁文化課長
竹内 一雄

例 言

1. 本書は、千葉市小食土町698番地他の千葉市昭和の森公園内に所在する小食土^{やしど}廃寺跡の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を得て、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査は、昭和60年10月7日から11月5日にかけて実施した。
4. 調査および整理作業・報告書作成にあたっては、調査主任 鈴木晋二男、研究部長 鈴木道之助、部長補佐 渡辺智信・古内茂の指導・助言のもとに調査研究員 永沼律朗が担当した。
5. 調査の実施にあたっては、千葉市昭和の森公園から、公園内を発掘させていただくとともに、多大の御援助をたまわった。記して感謝の意を表すものである。
6. 調査に実施にあたっては、下記の機関から多くの御協力をたまわった。
千葉市教育委員会・土気地区遺跡調査会・(財)千葉市文化財調査協会
7. 調査に関しては、下記の方々には、種々の御教示をいただいた。
滝口宏・武田宗久・渡辺太助・岡田茂弘・多宇邦雄・安藤鴻基・須田勉・田中新史・後藤正
・宮本敬一・青沼道文・寺門義範・穴沢義功・倉田義広・山路直充（敬称略）
特に、宮本敬一・今泉潔両氏からは、多大な助言と協力を得て、本報告書が完成したこと記し、感謝の意を表します。

目 次

序文

例言

I. はじめに	1
1. 小食土廃寺跡の位置と環境	1
2. 小食土廃寺跡周辺の関連遺跡	1
II. 調査経過	4
1. 調査経過	4
2. 調査方法	5
III. 検出遺構	6
1. 基壇	6
2. 掘立柱建物跡	7
3. 溝	8
4. 1号竪穴住居跡	9
5. その他の遺構	9
IV. 出土遺物	10
1. 瓦	10
(1) 鏡瓦	10
(2) 宇瓦	11
(3) 男瓦	13
(4) 女瓦	13
(5) 提瓦	14
(6) 文字瓦	14
2. 土器他	14
V. まとめ	16
1. 遺構	16
2. 遺物	19

挿 図

第1図	小食土廃寺跡の位置と周辺の関連遺跡	2
第2図	地区割模式図	5
第3図	基壇外装模式図	17
第4図	上総国分寺創建期軒先瓦の分布	19
第5図	上総国分寺重圏文系軒先瓦の分布	19
第6図	小食土廃寺所用瓦の系譜	21

図版・図面

PL.

1. 全景
 1. 遠景 西から
 2. 近景 南から
 3. 空からみた小食土廃寺跡周辺の地形
2. 基壇
 1. 南西隅 北西から
 2. 西側 南から
 3. 全景 西から
3. 基壇
 1. 基壇土層断面 南東から
 2. 版築状況 南から
 3. 外装基部土層断面 北から
 4. 外装厚板痕 西から

第1図 基壇南側土層断面図
第2図 北側外装部土層断面図
第3図 西側外装部土層断面図
4. 掘立柱群
 1. 北側掘立柱群 北西から
 2. 掘立柱穴土層断面 南から
 3. 掘立柱上面遺物出土状況 東から

第1図 北側掘立柱群平面図
第2図 特殊遺構土層断面図
第3図 西側掘立柱群平面図
5. 溝
 1. 南部分 東から
 2. 土層断面 北から
 3. 遺物出土状況 北から

第1図 1号溝南側平面図及び土層断面図
第2図 1号溝東側平面図及び土層断面図
6. 1号竪穴住居跡他
 1. 基壇南方トレンチ 南から
 2. 基壇東側北トレンチ 北から
 3. 基壇北方トレンチ 南から
 4. 1号竪穴住居跡全景 南から
 5. 1号竪穴住居跡遺物出土状況 東から
7. 鏡瓦
 - I類(1.2) II類(3~7)
8. 字瓦
 - I類(1~6)
9. 字瓦
 - II類(1・2・6・7), II'類(3・4), II''類(5)
10. 字瓦
 - III類(1.2.5.6)・IV類(3), V類(4)
11. 男瓦と文字瓦
 - 男瓦(1), 文字瓦(2~7)
12. 女瓦と提瓦
 - 提瓦(1・2), 女瓦(3), 女瓦部分(4~6)
13. 1号竪穴住居跡
出土遺物
 - 不明須恵製品(1), 墨書土器(2~5), 土師器(6~7), 須恵器(18)
14. 遺跡内出土遺物
 - 鉄釘(1~4), 須恵器(5~12), 灰釉陶器(13・14), 土師器(15~17), スラッグ(18・19)

PLAN

1. 小食土廃寺跡周辺の地形測量図(昭和の森公園造成前)
2. 小食土廃寺跡地形及び遺構図
3. 小食土廃寺跡遺構全体図
4. 小食土廃寺跡基壇平面図及び土層断面図

I はじめに

1. 小食土廃寺跡の位置と環境 (第1図, PL. 1-3)

小食土廃寺跡(以下本廃寺跡とする)は、国鉄外房線土気駅で下車して、県道大網線を東に10分ほど歩いた千葉市昭和の森公園内の千葉市小食土町698番地他に所在する。千葉市内で最も標高の高いこの地区は、房総半島が太平洋につきだした基部のほぼ中央にあたり、東に大網白里の街並を眼下にし、遠くは太平洋が見える房総台地の東の端にあたる。また、この地区は、北方から印旛沼に流れる鹿島川、南西方からは東京湾に注ぐ村田川が源流を發し、その分水界をなしており、東京湾にむかつてはなだらかに傾斜し、太平洋側は急崖となっている。

旧土気地区は、昭和54年7月に「千葉市土気地区遺跡調査会」が発足され、小食土町、小山町、大椎町にわたる大規模な開発にともなう発掘調査が行われている。*によれば、この地区には、先土器時代から縄文時代早期及び前期にかけて広い範囲に遺跡がひろがるが、それ以後、古墳時代後期までの間には大きな集落はないようである。しかし、古墳時代の後期には、本廃寺跡から直線で南に800mほどのところにあった舟塚古墳**のような前方後円墳も築造され、その頃からは集落もふえてきたようである。

2. 小食土廃寺跡周辺の関連遺跡 (第1図)

まず、とりあげねばならないのは、本廃寺跡から東にわずか500mの昭和の森公園内にある荻生道遺跡***である。荻生道遺跡は、多くの竪穴住居跡とともにまわりに溝をめぐらした掘立柱の建物跡が発見され一躍有名になった。荻生道遺跡と本廃寺跡は同じ台地上にあり距離的にも非常に近く、時期的にはほぼ同時期と考えられることから、なんらかの関係があったと思われるが、その間の地区は発掘調査が行われていないので明確な関係は今のところ不明である。

本廃寺跡から東に1.7kmほどのところに大椎廃寺跡****とよばれるところがあり、以前からこの地区では古瓦が発見されていたがその実態は不明である。出土している古瓦は、素文縁四葉単弁蓮華文鏡瓦と段顎三重弧文字瓦等がある。鏡瓦は、君津市九十九坊廃寺跡*****や市原市光善寺廃寺跡*****

* 『土気駅南地区の遺跡』 千葉市土気地区遺跡調査会

** 中村恵次 「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」『古代』第48号 早稲田大学考古学会 昭和42年3月

*** 詳細は未発表の為不明なので、*を参考とした。

**** 服部清道 「上総大椎の古瓦遺蹟調査概報」『房総郷土研究』第4巻第2号 昭和12年5月

***** 森本和男 「九十九坊廃寺跡確認調査報告」千葉県教育委員会 昭和60年3月

***** 大川 清 「上総光善寺廃寺」『古代』第24号 早稲田大学考古学会 昭和32年5月



第1図 小食土麿寺跡の位置と周辺の関連遺跡 (1:50,000)

創建期瓦の文様の系譜をひくものであるが、周縁は三重弧文が素文化し、中房の蓮子も見られなくなるなどそれらよりも新しい様相をしめしており8世紀前半代の寺跡かと思われる。また、女瓦は凸面に布目痕を有し、いわゆる凸面布目瓦と呼ばれているもので、光善寺廃寺跡から出土するものと同じ技法であり、この点からも大椎廃寺跡が、光善寺廃寺跡となんらかの関係があったことがうかがわれる。

本廃寺跡の北方4.3kmのところには、大綱山田台遺跡^{*}がある。この遺跡は、奈良・平安時代の集落跡である山田水呑遺跡^{**}の近くにあり、最近発掘調査が行なわれて、はじめてその存在が知られた遺跡である。その中でもNo.3とよばれている遺跡内では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が100軒近くと、掘立柱の建物跡が発見された。特に掘立12と呼ばれている建物跡は、身舎が3間×4間で南側に庇を付けた建物であり、これらの建物群の中でも中心的な建物であったらしく、その後、礎石をもつ建物に建てかえられている。おそらく、この建物が瓦葺であったらしく、周辺から古瓦が出土しており、そのうち宇瓦は、上総国分寺跡から出土するものと同じものであり、9世紀後半から10世紀前半頃のものであろう。この宇瓦から明らかのように、この遺跡は、上総国分寺と有機的な関係にあったと思われる。

最後に、本廃寺跡から東に1.1kmのところにある南河原坂第4遺跡^{***}をとりあげる。この遺跡からは、瓦及び須恵器が焼かれたと思われる窯が多数発見されており、そのうちの一部は発掘調査が行われた。窯は、無階無段登窯やロストル式平窯等が発見されている。ここで焼かれた瓦が本廃寺跡に供給されたことはまちがいない。すなわち、南河原坂第4遺跡で出土した、変形の唐草文様宇瓦、ヘラ書きの宇瓦等が本廃寺跡からも出土しているからである。しかし、本廃寺跡で所用された瓦がすべてここで生産されたものかどうかは今のところ不明である。この他に南河原坂第4遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけて、多くの竪穴住居跡が発見され、後述の本廃寺跡出土宇瓦Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類が出土している鐘つき堂遺跡や、土師器を生産していたと思われる工房跡等^{****}も発見されており、今後発掘調査が進めば、本廃寺跡との関係も明確となろう。

* 「見学のしおり」(財)山武郡南区文化財センター遺跡見学会資料(1) 財団法人山武南部地区文化財センター 昭和60年2月

「大綱山田台No.3遺跡」『千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会 昭和61年2月

** 松村恵司他 『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会 昭和52年5月

*** 野村幸希・松原典明他 『南河原坂第4遺跡—調査概要—』千葉市土気地区遺跡調査会 昭和61年5月

**** 発掘調査担当の穴沢義功氏から御教示を得た。なお、同遺跡には瓦葺建物はなかったようである。

***** 「坂ノ越遺跡」『千葉県遺跡調査研究発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会 昭和61年2月

II 調査経過

1. 調査経過

小食土廃寺跡の調査は、千葉県教育委員会が実施している古代寺院跡確認調査の一環として行われたもので、財団法人千葉県文化財センターに委託され、昭和60年10月7日から昭和60年11月5日にかけて発掘が行われた。

この地域は以前から古瓦が表採され、荻生道遺跡の発掘調査でも古瓦が出土したことなどにより近くに寺院跡があるのではないかといわれてきた。しかし、その実体は不明であったので、北及び西側に谷が入りこみ舌状となっている台地の先端近くで集中して古瓦が散布している状況から、この付近を中心にまずボーリング調査を実施した。その結果、昭和の森の公園内の「太陽の広場」と呼ばれている芝地と接した杉林で、周辺より若干高く、古瓦が多く表採できるところがあり、ボーリング調査からも基壇の可能性が高いことが判明した。

そこでまず、この高まりにトレンチを設定して掘り下げると、かなりしまりのよいロームブロックのまじる黒色土が検出され、瓦も多量に出土し、これが基壇であることが明らかとなった。その後、この基壇については、四隅と、基壇の上に建っていた建物の礎石等の検出に全力を注いだ。基壇の四隅は一部杉の木で調査ができないところもあったが、ほぼ概略はわかった。しかし、基壇の上の建物については、まるで不明で、礎石はその石くずさえも発見できず、礎石を据えつけたような落ちこみ、その他の柱穴と思われるようなものも発見できなかった。しかし、基壇の周囲では、おそらく、基壇の外装であろうと思われる厚板の痕跡が発見できたことは思わぬ成果であった。

基壇の発掘と併行して、周辺に寺域及び他の建物跡を確認すべく、多くのトレンチを設定した。その結果、瓦が多く出土するのは、この基壇の周辺だけで、基壇から遠くなれば少ないことが判明した。すなわち、瓦葺の建物はこの基壇上の建物だけと考えられるようになった。

また、各トレンチ内では多くの遺構が検出されたが、その多くは、本廃寺跡より以前の竪穴住居跡であった。基壇の北側と西側で掘立柱群が検出されたのは、調査も終りが近くなってからであり、北側の掘立柱群は、杉林内のトレンチで瓦が多い部分があったので掘り下げてその性格を明らかにしようとしたところ、2・3間分のかなり大きな柱穴が発見された。杉の木は伐採ができないので、間をぬってかなりトレンチを拡張したが、その規模は、今回の調査では明確にすることができなかった。また、これらの北側掘立柱群トレンチ内の東端で製鉄に関連すると思われる遺構が検出されたことは、予想外であった。西側の掘立柱群も当初は、小さな攪乱と考えていたが、トレンチをひろげるにつれ、柱穴であることが判明した。しかし、調査期間がなく、これ以上のトレンチの拡張はできず、建物の規模は不明である。

調査区内では数条の溝が発見されたが、基壇を巡るような溝（1号溝）が一本発見された。この溝はまず、基壇南側の芝地内に入れたトレンチ内で発見されたが、その西側のトレンチ内には溝は続かなかった。しかし、基壇東側のトレンチ内で瓦が多く入った溝が発見されたので、その続きを検出する為北側にもトレンチを設定したところ多量の瓦の入った溝が発見された。この溝は、南側芝地内で検出された溝とその形がよく似ていることから続く可能性があると考え、その交差すると思われる地点に10m×10mの大きなグリッドを設定した結果、予想通り、二本の溝が一本の溝となって続いていることが判明した。また、この頃には、北側及び西側掘立柱群の近くでも同様な溝が検出され、おそらく一本の同じ溝であろうと推測したが、時間的な余裕がなく、北東コーナーや北西コーナーは検出できなかった。

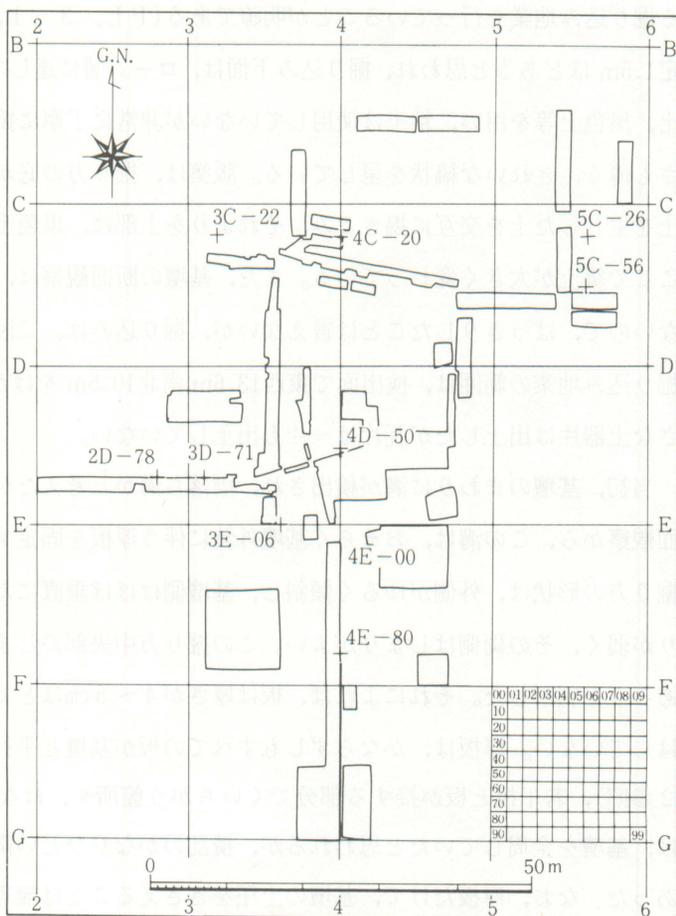
その他、多くの遺構を検出したが、時間に追われ、性格も解明できずに11月5日には埋めもどしを完了して発掘調査を終了した。

2. 調査方法

上記のようにボーリング調査により基壇と思われる高まりを確認して、そこを中心として発掘を行った。

発掘区の設定は第2図に示したように公共座標を利用して行い、2m×2mの最小グリッド名は左上方隅の地点名とし、遺構の位置及び遺物の取りあげ等の便宜をはかった。

調査に際して、トレンチはなるべく座標にそった形で設定したが、調査区が「昭和の森」という公園内の為かなり制約をうけ、杉の木は一本も伐採ができないので、一部任意にトレンチを設定した部分もある。また遺構がある程度はつきりしたものについては、遺構にあったトレンチを設定して調査を行った。



第2図 地区割模式図

II 検出遺構

1. 基壇 (P.L. 2, 3, PLAN 4)

発掘調査に入る前のボーリング調査により基壇の大よその位置がわかったので、なるべく基壇の規模を把握できるよう四隅の検出を心がけるとともに、上屋構造の解明に主眼をおいた。しかし、大きさがわかるにつれ、隅が杉の木の下となる箇所が多く、結局南東及び南西隅は調査することができなかった。基壇の中央部は、地表面から掘り込まれた、いわゆる版築の手法によるものであるが、そのまわりに厚板を巡らしていることが判明した。基壇の端を石や瓦等で化粧や外装をおこなっている場合は、基壇の規模もおのずと明らかになるが、掘り込み基壇が存在することはわかって、周囲の化粧等に石や瓦を用いない場合、基壇の明確な規模は不明なことが多く、本廃寺跡ではその点がはっきりしたことは、大きな成果である。

基壇の中央部は、地山を掘り込んだ中に新しく築土を搗きこんだ、いわゆる版築の手法による掘り込み地業を行っていることが明瞭である(P.L. 3-1, 2参照)。厚さは、中央部で推定1.5mほどあると思われる、掘り込み下面は、ローム層に達している。築土はローム土、暗褐色土、黒色土等を用い、粘土は使用していないが非常に丁寧に搗きかためられており、各層の厚さも薄く、きれいな縞状を呈している。版築は、掘り方の底から50cmほどを、ローム土と黒色土を主とした土を交互に搗きこみ、それよりを上部は、黒色土を主とした土を搗きこんでおり、ここで築土が大きく変わっている。また、基壇の断面観察は、北側の一部でしかおこなっていないので、はっきりしたことは言えないが、掘り込みは、二段になっている。基壇下部のこの掘り込み地業の範囲は、検出面で東西13.6m 南北10.5mをはかる。なお、版築土中からは、小さな土器片は出土したが瓦片は一片も出土していない。

当初、基壇のまわりに溝が検出され、雨落ち溝かと考えたが、その後の平面及び部分的な断面観察から、この溝は、おそらく基壇外装に伴う厚板を固定する為の掘り方と考えるに至った。掘り方の形状は、外側がゆるく傾斜し、基壇側はほぼ垂直にたちあがる。覆土は中央部でしまりが弱く、その両側はしまりがよい。この掘り方中央部のしまりの弱い部分が、厚板の痕跡であろうと判断した。それによれば、板は厚さが4~5cmほどで、巾は30~40cmぐらいあり一定はしていない。厚板は、かならずしもすべての板が基壇と平行に並べられてはおらず(P.L. 2参照)、若干板と板が接する部分でくいちがう箇所や、はなれている箇所もある。この厚板は、基壇を全周していたと思われるが、攪乱のかなりひどい南西側及び北西隅で不明な部分があった。なお、厚板だけで、基壇の土圧をささえることは無理であろうと考え、この厚板を補強する為の柱等があった可能性も追求したが、その痕跡を明確にすることはできなかった。

また、基壇東側中央部は、基壇の東側をほぼ南北に走る溝(2号溝)や攪乱の為に不明瞭で

あり、版築のあり方に若干疑問をもつ部分はあるものの、階段等の付随施設があったかどうかは、今回の調査では不明であった。

基壇上面は、ほぼ四分の一ほどの調査であるが、かなり削平されたようで、この範囲からは、礎石や柱の痕跡等を検出することはできず、建物の構造については、まるで知る手がかりを得ることはできなかつた。基壇の規模は、上述の厚板が何なのかによってもかわるが、仮りにこの厚板が基壇の土止めを兼ねた、基壇外装であるならば、当然基壇の規模も厚板までとなり、その場合、基壇は真北から若干東にふれて東西15m、南北12mとなる。基壇がこれくらいの規模であるならば、この上にあった建物は、4間×5間ほどの建物が想像されよう。

基壇外装の厚板の外側もかなり削平されていると思われ、雨落ち溝や、その他の付随施設は発見できなかつた。

遺物は、基壇の周辺から瓦が多量に出土したことは言うまでもないが、基壇の東側攪乱部からは、かなり須恵器片がまとまって出土している。調査区全体をみても瓦の出土量は、この基壇周辺が非常に多く、他に溝や北側掘立柱建物跡周辺でも多いが、それ以外の地点では少なく、この基壇のように瓦葺きの建物が他にある可能性は低いと思われる。

2. 掘立柱建物跡 (P L. 4)

調査区内の各所で掘立柱建物跡かと思われる柱穴を検出しているが、今回調査区を拡張して、その続きを確認したのは2箇所にとどまる。しかし、これらについても、調査区を十分に拡張しきってなく、断面観察等も行っていないので不明な点が多く、建物の実数も明らかでない。

(1)基壇北側掘立柱群

この掘立柱群では、都合九個の柱穴が検出された。掘り方は方形に近いものが多く、80cm×100cmほどであろうか。柱穴のうちで、北西隅のものと、一番南側のものは、柱痕跡が不明であった。北西隅の柱穴の上層には多量の瓦が入っており、この柱穴が建て替えや柱の抜き取りがおこなわれた可能性もある。柱間は、東側の2間分が1.3mで、その西側の2間は1.5mである。これらの柱痕跡は、完全に一直線に並んでないことを考えると複数の建物があったことも考えねばならないが、今回の調査では、これ以上は不明であった。なおボーリング調査により、柱穴の深さは、1m前後で、中には埋め土の中に瓦を入れているものもあつたことがわかつた。なお、掘立柱群のすぐ南には、後述のように基壇をめぐるかなり瓦の入った1号溝が走っているが、それとの関係は明確にすることはできなかつた。

(2)基壇西側掘立柱群

基壇から西へ30mはなれたところでも柱穴群が検出された。これらは、北側の柱穴に比べると小さいが、数棟分あると思われる。しかし、ここでも時間的な制約の為に全体がわかるように調査区を拡張することはできなかつた。掘り方は小さいが、柱間1.2mほどで南北に3間分の

柱痕跡が検出できたが、その北側には、かなり大きな攪乱があり不明であった。また、この柱穴群の南側にも柱穴があるようであるが、この柱穴はさきのものとは並らばず、別の建物かと思われる。また東西方向でも、中央部の四角の掘り方をもつ柱穴は、他の柱穴とは趣を異にし、別の柱穴もあり、どの柱穴がどう関連するかは不明で、建物の数、規模等も不明である。

他にも、柱痕跡がわかるものもあるが、調査区内だけではどのような建物になるのかはわからなかった。しかし、基壇のすぐ西側で二本だけ検出された柱穴は、かなりしっかりしており、その周辺には、これらに続くような柱穴は発見できなかったのも、もしかするとこの二本で何か特別な性格をもっていたのかもしれない。

3. 溝 (PL. 5)

今回の調査では、数条の溝を検出しているが主なものだけ説明する。

基壇を中心として、四方にトレンチを設定してゆくと、基壇の南側、芝地内では瓦がかなり入る溝が検出されたので、この続きを確認すべくその西側10mほどのところにもトレンチを設定したが、溝は検出できなく先の溝に疑問をもった。しかし、基壇の東側7mほどのところでも、南側で検出した溝と同様に断面形が逆台形でかなり瓦の入った溝を確認することができた。しかも、このトレンチの北側トレンチ内でも検出面に多量の瓦がはいった溝が検出され、これらの溝はすべて一本の溝の可能性が高くなった。そこで、これら東側の溝と南側の溝が合流するであろう地点に調査区を設定し、数条の溝、竪穴住居跡の中にあきらかに上記の二条の溝がつながるコーナー部分を確認した。これらの溝は、さきにも記したように、逆台形をしており、遺存のよい基壇東側検出面で上端1.3m、下端0.8mを計り、覆土の状況から自然に埋没し、その中に瓦や土器が流れこんだと思われる。また、基壇の北側及び西側でも同様の溝を検出した。基壇の北側では、上面での確認の為、形状等は不明であるが、溝の上面からは、多くの瓦が出土しており、大きさ等からみても同一の溝であろうと思われる。西側で確認した溝の中からは、他の溝のように瓦は出土しないし、溝のたちあがりも若干不整形ではあるが、北側の溝が先に説明した南側、東側の溝と同一の溝だとすると、この溝の延長部分と思われる溝は、基壇の西側トレンチ内でこれしかなく、北側の溝は西側で大きく南に向きをかえてこの部分に続いていたと思われる。この基壇をめぐる溝を1号溝とする。なお、溝を最初に検出した基壇南側で、溝が西側に続かない点については、地形図(PLAN 1, 2)からも明らかのように谷部となる為この部分では溝が浅かったか掘削しなかったためと思われる。これらの状況から、この1号溝は、南西部の谷の部分のをぞいては、基壇をめぐっていたと思われ、もちろん基壇と無関係であったとも思えない。であるならば、なにゆえに基壇は溝でかこまれた空間の中央に構築されなかったのであろうか。その点については不明であるが、あまりにも未調査部分が多すぎるので、これらの問題の解決は、今後の調査に期すこととしたい。

2号溝は、基壇のすぐ東側を南北に走る溝である。この溝は、基壇の東側で北にのびたトレンチ及びその北のトレンチ内も南北に走っており、芝地内の3E区に大きくあいたグリッド内にも続いている。時期は明確でないが基壇を壊していること、瓦の入った1号溝を切っていることなどから新しいものと思われる。

3号溝は、基壇から3mほど北を東西に走る溝である。この溝は二段に掘られており5C-98区で確認したところでは、その溝の中に柵か柱等があったようである。しかし3D-17区内の溝の覆土中から寛永通宝が出土しており、この溝も本廃寺跡とは関係がなさそうである。

4. 1号竪穴住居跡 (P.L. 6-3, 4)

調査区内の随所で竪穴住居跡は確認しており、最低12軒以上の住居跡があると思われる。しかし、この内で明らかに本廃寺跡よりも新しい住居跡は1軒^{*}だけで、他の住居跡はすべて本廃寺が造営される以前の時期のものようである。基壇から東に14mほどの、北側の谷に面したところで検出された1号竪穴住居跡は、確認面からかなり瓦片が出土した。この住居跡は、トレンチ内の確認では東西に2.5mで、南側の中央部をのぞいて壁溝が巡る。またトレンチの北側では、焼土が散っており、カマドは住居の北壁に備えられていたと思われる。床面の精査は不備な点もあるが、柱穴は明確にすることができなかった。本住居跡からの出土遺物は、カマドのあるトレンチの北壁下で床面から出土した完形の男瓦(P.L. 11-1参照)をはじめとして、4点の墨書土器、鉄鉢形土器、鉄釘、スラッグ、不明須恵製品等(P.L. 13参照)が出土している。遺物等からみて、9世紀前半代の住居跡であろう。この時期であれば、本廃寺跡もまだ存在していた可能性が高く、その場合には、本廃寺跡と関連した住居跡ということになる。

5. その他の遺構

その他の遺構としては、北側掘立柱群が検出されたトレンチの最東部に特殊な部分がある。この部分、北側掘立柱の最東端の柱穴のさらに東側は、人為的に埋めもどしが行われ、柱穴の検出面でもかなり硬化していた(P.L. 4の第2図参照)。平面の調査では二つ目の基壇かと思うほどであった。しかし、一部断面を観察したところ、この硬化面は、厚さ4~5cm程度であり、その下にはスラッグを含む別の遺構があるようである。時期は明らかではないが、東側にも、こまかいスラッグが集中して出土する遺構が検出された。調査区内の他の地点からも、いわゆる椀形滓等も出土しているが、それらに比べると、ここから出土するスラッグは、小さいものが多く、この近くに製鉄関係の遺構がある可能性を示唆しているものと思われる。

また、基壇北東トレンチ内でも径50cmほどの範囲で瓦が集中し、1mほどの間隔で並んで発見され、柱穴かと思われたが掘り下げても柱痕跡がない遺構もある。

* 3D-56区からは、P.L. 14-7が出土しているが、遺構は未調査の為不明である。

IV 出土遺物

1. 瓦 (PL. 7~12)

(1) 鏡瓦 (PL. 7)

本廃寺跡からは二種類の鏡瓦が出土しているので、便宜上、それらをⅠ類、Ⅱ類としてあつかう。以下宇瓦も同じである。

鏡瓦Ⅰ類 (PL. 7-1, 2)

ここで鏡瓦Ⅰ類とするものは、いわゆる素縁二十四葉単弁蓮華文鏡瓦と呼ばれるもので、平城宮の軒先を飾った鏡瓦^{*}の系譜をひくものである。今回の調査では、このⅠ類の鏡瓦と断定できる破片は12点ほどであり、完形品は1点も出土していないが、その文様の特徵から、上総国分寺の創建時に用いられた鏡瓦と同型品であることはまちがいない^{**}。PL. 7-1が一番大きなものであり、中房部分はなく5分の1程度が残るにすぎない。蓮弁はシャープで、その外に二重圈文をめぐらし、周縁は素文となっている。破片の多くは、色調がグレーで、かなり砂っぽい感じに焼かれている。中にはかなり暖褐色の破片もある。

鏡瓦Ⅱ類 (PL. 7-3~7)

非常に特異な文様をした鏡瓦で破片が5点出土している。PL. 7-3には圈線が2本あり、しかもその間には瓦当面を四分割するように縦に突帯が付いている。PL. 7-6からみると、その内側にも同じ円圈が巡るようである。3と6は同范品である。それは、突帯で区画された珠文のつく面に、范のキズと思われる箇所が双方に3箇所ずつあることからいえる。PL. 7-5は周縁近くにも突帯があるようであるが欠けて不明である。また、珠文の左右には、1・2のような范の中のキズではなく、細く低い突帯があるようである。PL. 7-4は、周縁から一番外側の突帯のごく一部が残る破片であり全体は不明であるが、3・5・6とはその突帯のつき方がちがうようである。これら4点の瓦当面の裏の周縁にちかい部分は、別の部分がはがれたような痕跡があり、その部分につくのがPL. 7-7のような男瓦の一部である。7にも、やはり接合部ではがれたような痕跡がある。男瓦の内側になる部分には布目痕があり、その上に瓦当部と接合する為の粘土がはりついている。他の面はヘラケズリされている。

これらを総合すると、この鏡瓦は、瓦当面に重圈文様の突帯を最低3本巡らし、しかもその間には、瓦当面を四分割するように放射状に縦帯が入り、その区画の内側には珠文がつけられているようで、周縁は特に加工せず平らに終わっている。裏面は普通の鏡瓦同様に男瓦を接合す

* 平城宮出土軒瓦型式番号6225A 『平城宮出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所 昭和53年3月

** 宮本敬一氏の御教示による。

るが、下半部分でも3cmほど男瓦の一部をのこして、不用な部分を切り落としたものと思われる。胎土は、若干白色粒が目立ち、焼成は良いが軟質で、色調は黄褐色を呈している。瓦当裏面はナデで仕上げられており、焼成時に火のまわりがわるかった為か、かなり黒っぽい。

(2) 宇瓦 (P L. 8～10)

宇瓦 I 類 (P L. 8)

いわゆる均整唐草文宇瓦と呼ばれているもので、上総国分寺跡から出土しているものの中には、同範のものがあるようである。^{*}本類の宇瓦も完形品は出土していないが、破片は41点にのぼる。図化したものは、そのなかでも大きなものであり、他はかなり小さい破片が多い。瓦当文様は、中心飾りから左右に唐草文が流れ、周縁には珠文が巡る。凹面は、瓦当側3cmほどのところまで瓦当面と平行してヘラケズリが行われ、その後方には、布目痕がつき、糸切り痕があるものもある。凸面は、瓦当面のすぐ下の部分が瓦当面と平行したヘラケズリで調整され、その後方は瓦当面とは直角方向にヘラケズリされている。本類宇瓦の女瓦部のタタキ痕は、今回の出土品の中に瓦当部から女瓦部のタタキ痕がのこる部位まで連続して遺存するものはなく不明である。しかし、凸面にヘラケズリとかなり細かい縄タタキ痕が続いている女瓦があり、上総国分僧、尼寺跡から出土している本類宇瓦も、凸面は細かい縄タタキ痕がつくので、その可能性がある。顎は、ヘラケズリで整形されたいわゆる曲線顎である。胎土は、鑑瓦 I 類の多くがそうであったようにかなり砂っぽく、焼成はすべて硬質でよい。P L. 8-1 は、瓦当面の文様のあがりも非常によく、文様もかなりシャープである。瓦当部と女瓦部の接合に関しては、明確な接合痕は不明であり、P L. 8-2 の凸面のようにブロックで剥離し、接着が不十分な部分もある。また、凸面の瓦当部近くには、朱痕かと思われる白い部分があるものもある。^{**}

宇瓦 II 類 (P L. 9-1, 5, 6)

本類宇瓦の特徴は、普通の宇瓦の文様が突線で表現されるのに対して、反対に沈線で文様が表わされている点にある。文様そのものは、本廃寺跡出土品の文様を反転して通常の形にしたものが上総国分僧寺跡から出土している。この文様は、おそらく宇瓦 I 類の文様が退化したものと思われ、中央には中心飾りととれる文様があり、左右に唐草文が続く。また、それらの文様の周縁近い空白部分には、珠文がつき、宇瓦 I 類の周縁部分にあった珠文をまねて散らしたものであろうか(第6図参照)。なお、本類宇瓦の瓦当文様は、上総国分僧寺跡から出土している宇瓦の一種とネガとポジの関係にあることは明らかであるが、国分僧寺跡出土の瓦当文様の大きさを100とすると、本廃寺跡出土品のそれは約78の比率で全体に小さくなっている。P L. 9-1 は、瓦当面上記の文様がつくものである。凹面は瓦当面から1cmほどを瓦当面に平行に

* 平城宮出土軒瓦型式番号6691A 『平城宮出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所 昭和53年3月

** 宮本敬一氏の御教示による。

してヘラケズリしており、凸面には、縄目のタタキ痕が残り、顎はタタキによってつくりだされているようである。焼成はあまく、凸面の縄タタキ痕も鈍くなり、色調も黄褐色を呈している。瓦当面右側の文様は範が二重におされたようにズレているが、他の破片もこのようなものが多い(PL. 9-5, 6 参照)。この点については、上総国分僧寺跡出土品よりも本廃寺跡出土品の方が、瓦当文様が小さいことも含め範に問題があってこのようにズレやすかった可能性もあろう。破片は、9点出土している。

◎ 宇瓦II'類 (PL. 9-2, 3)

これらの宇瓦をII'類したのは、瓦当文様はII類のものと同じであるが、文様をつける前に瓦当面を縄目がつくタタキ板で成形しているからである。破片数は3点である。焼成はII類と同様にあまりよくなく、色調は茶褐色を呈し、軟質でもろい。凹面には、布目痕とともに粘土板を切り取る際の糸切り痕が明瞭に残る。PL. 9-3は、この類の中では一番遺存のよいものである。凸面は縄タタキ痕が残るが、顎はさほど段がついていない。PL. 9-4は、本類の中で瓦当面の左端がわかる資料である。

◎ 宇瓦II"類 (PL. 9-4)

II"類の瓦当面から唐草様の文様を省いたものが本類である^{*}。本類宇瓦のつくりでII'類とちがう点は、瓦当面の両端が中心部に比べうすくなっていることぐらいであり、ほかは同じである。破片数は3点である。厚さは中心部で5.5cmを計る。

◎ 宇瓦III類 (PL. 10-1, 2, 5, 6)

本類の宇瓦は、南河原坂第4遺跡の瓦窯跡で生産されたものである。今回の調査では、完形品の出土はなくPL.10-1が最も大きなものであるが、南河原坂第4遺跡の出土品で文様の全体はわかる。文様は、瓦当面の中央を横に走る突帯により上下に区画されている。上の区画の文様は中心部に縦に短く突線があり、そこから左右同じように、四葉文、唐草文、そして四葉文が二つ配されている。下の区画は、中心部となる部分に逆T字形の小さい突起があり、文様はそこを中心としてほぼ左右対称に四葉文、唐草文様等が散りばめられている。PL.10-1は、暖褐色に焼きあがっているが、PL.10-2は、グレーでかなり砂っぽく軟質である。凹面は瓦当面から2.5cmほどの範囲をヘラケズリしており、糸切り痕も明瞭である。凸面は、ナデによって仕上げられている顎がつけられており、女瓦部はかなり粗い縄タタキ痕がつく。本類の破

* 類例として、武蔵国分寺跡・常陸国新治廃寺跡出土品等をあげることができる。

有吉重蔵他 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』 V 武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 昭和56年3月

高井悌三郎 『常陸国新治郡上代遺跡の研究』 昭和19年10月

** 『南河原坂第4遺跡 一調査概要一』には、この瓦は掲っていないので、下記の資料によった。

『第6回関東古瓦研究会資料 上総 安房編』 昭和58年11月

片数は12点である。なおPL. 10-1の薄いアミをかけて下図とした宇瓦は南河原坂第4遺跡から出土したもので、本来の瓦当文様は、凹面側にもう少し文様がのびているようである。

宇瓦IV類 (PL. 10-3)

この類の宇瓦は、図化した1点のみであり、全体の瓦当文様は不明である。この資料を宇瓦と断定したのは、凸面に瓦当面と平行したヘラケズリがおこなわれているからである。すなわちこの破片は、宇瓦と女瓦との接合部で剥がれた顎の部分である。瓦当面には、方形の突起があり、それらの上方にもあったようであるが不明である。これらの文様は、ヘラによって削りだされているようで、範によってつくられたものではないと思われる。胎土中には白色粒が非常にめだち、色調は灰色に焼きあがっている。なお、南河原坂第4遺跡から、本類のような宇瓦が出土しているかどうかは不明である。

宇瓦V類 (PL. 10-4)

V類とする宇瓦は、瓦当面の文様がヘラ書きによるものである。今回の調査では、1点しか出土していない。瓦当面は、ナデで仕上げられ、そこに両側ですぼまる4本の沈線が書かれている。凸面には、ヘラケズリがおこなわれており顎の整形痕と思われる。本破片は、瓦当面の4本目の沈線の部分がちょうど女瓦との接合部であつたらしく、そこで剥がれたものである。表面は、かなり黒い茶褐色であるが、断面は暖褐色を呈する。本類は、瓦当文様がヘラ書きの為、文様が完全に同じものはなかろうが、南河原坂第4遺跡からも4本の沈線で描いた文様を単位とするような宇瓦が出土しており、この宇瓦もその製品であると思われる。

(3)男瓦 (PL. 11-1)

男瓦は、調査区内から多量に出土しているが、全体がわかる資料は、基壇東側の1号竪穴住居跡床面から出土した1点のみであり、他は破片もさほど大きくない。1は広端部巾が17cm、狭端部で10cm、全長37.5cmを計る。色調は暗褐色を呈し、凸面はナデで仕上げられている。男瓦は、この他の破片にも玉縁がつくものではなく、すべて無段の行基葺き用のものである。

(4)女瓦 (PL. 12-3~6)

女瓦も、男瓦同様にかかなりの量が出土しているが、これらの資料の中には、凹面と格子タタキ痕がつくもの、桶巻作りによって作製したものがないことはまちがいない、おそらく、女瓦のつくり方は、上総国分寺跡出土品と同様に凸型を利用した一枚作りによるものであろう。今回の出土品の中で女瓦一枚の大きさがわかる資料は、北側掘立柱の柱穴上層から出土したものの1点である(PL. 4-3参照)。この資料によれば、一枚の大きさは広端部巾25cm、狭端部巾22cm、全長34cm前後に復原できる。なお、女瓦の凸面に布目痕がつくもの(PL. 12-4, 5参照)があるが、これは、女瓦作成時に凸型からはずす際についたものと考えられ、^{*}いわゆる、凸面布目の女瓦とはちがう。PL. 12-6は、凹面にかなりシャープな糸切り痕がのこる

* 上総国分寺跡からも出土している。宮本敬一氏の御教示による。

資料である。

(5) 提瓦 (P L. 12-1, 2)

提瓦は、2点出土しているが、つくりはともによくにている。これらの提瓦は、女瓦を縦に二分割してつくられており、半断面には、凹凸面両側からするどい刃物で5mmほどキザミが入れられており、それらは中心部までは達しておらず、中心部は割られた痕が明瞭に残っている。1, 2とも凸面はややこまかい縄タタキ痕がつく。1は、女瓦の広端部側であり、広端面には、巾5mmほどでU字状に窪むところが数箇所あるが、瓦製作の乾燥時にたてかけた際に下方にでもなったためであろうか。凹面には布目痕とともに、糸切り痕も明瞭にのこる。2は、女瓦の狭端部側であつたらしく、端面から序々に広がる傾向にある。端面の半断面と反対側の部分には女瓦作製時の凸型の痕跡が残っており、凹面には、布のはしのほつれた部分が明瞭であり、これらの点から提瓦のもととなった女瓦が、凸型を利用した一枚作りでつくられたことがわかる。なお、製品として道具瓦と思われるものは、この提瓦2点だけである。

(6) 文字瓦 (P L. 11-2~7)

今回出土した文字瓦は、すべて男瓦にヘラで書かれたものであり、全部で7点ある。その中でP L. 11-2, 3は、男瓦の広端部近くの凸面のほぼ同じ位置にヘラ状工具により細かい線で書かれている。当初、これらは、文字としては、判読不能であり、文字瓦とは考えなかったが、2点とも男瓦のほぼ同じ位置に、同じような手法により書かれていることと、他のP L. 11-4, 5, 6の資料からみて、文字瓦と判断した。すなわち、4, 5, 6は1, 2と比べるとヘラ書きの線も強くしっかりしており、その手法はちがうが、2, 3の瓦の文字が二字であるとするならば、4, 5, 6のヘラ書きは、そのうちの二文字目の部分と考えた。しかし、それでも判読をすることはできない。なお、4, 5, 6のヘラ書きも、男瓦の側面に近い部分におこなわれている。P L. 11-7にもヘラによる沈線があり文字瓦の可能性はある。

2 土器他

今回の発掘調査では、各トレンチから土師器、須恵器片等が出土しているが、基壇東側1号竪穴住居跡とその他の主な遺物を説明する。

1号竪穴住居跡出土遺物

1号住居跡内からは、多量の瓦片を含む土器片、鉄釘、スラッグ等が出土している。P L. 13-9は、いわゆる鉄鉢と呼ばれる器形の土師器で、全体の六分の一程度が出土している。内外面ともに黒色に仕上げられ、外面は、底部周辺を放射状にミガキ、体部は横方向にミガいている。また、内面には、底部を中心とした放射状の暗文風にミガキが入れられている。底部の中央部は欠くが、けっして尖頭形にはならないと思われる。P L. 13-6は、やや大ぶりの土師器の杯で、内外面ともに丁寧にミガかれている。P L. 13-18は、須恵器の杯であるが、

胎土中に白色粒子がめだち、内外面ともに器表面がザラザラしており、断面をみると、かなり気泡の穴がある。また非常にゆがんでおり、口縁は正円を描かない。P L. 13-2~5には土師器の杯に墨書文字が書かれている。2は、横棒の上に文字が続くようであるが欠ける。3も円の中に縦に棒があるようではあるが全体は不明であり、4も縦に線がかかれた最後の部分が残る程度で判読はできない。また、4には底部にも墨痕がついている(P L. 13-4参照)。5は底部に二文字の墨書があり、一文字目は「冨」と読めるが、二文字目は左側と下が欠けており判読できない。P L. 13-1は、用途不明の須恵製品である。側面は面とりされており、上下面ほぼ平らになっている。これらの遺物は、9世紀代の所産であろう。

灰釉陶器 (P L. 14-13, 14)

13は、3号溝(5C-98区)からの出土品である。器形は皿になると思われ口縁部が4cmほど残る破片である。内面から口縁端部までは淡緑色の釉がかけられ外面には釉はかかっていない。胎土は、淡黄色を呈する。14は3E-52区からの出土品で底部が二分の一ほどある。胎土は、かなり灰色を帯びる。外面には高台付近に淡緑色の釉の一部が付着している。

須恵器 (P L. 14-5~12)

5~10は、基壇周辺から出土したものである。須恵器の多くは、4~8のような杯及び高台のつく杯である。10はそれらのうちで一番大きいものであり、体部内面にヘラで「川」と記号状のものが書かれている。9は、金属器を模倣したと思われる須恵器で体部中位に突帯を巡らし、口縁部も強く外にひらく。11, 12は、3E-74区の2号溝内サブトレンチ内から出土した。12は、底部に焼台の一部が付着しているが、焼台がどのようなものであるかは不明である。

土師器 (P L. 14-15~17)

15, 16は、北側掘立柱群の確認トレンチ内4C-51区で遺構は不明であるが、瓦がまとまって出土した地点から出土した。2点とも燈明皿として用いられている。底部は15が回転ヘラケズリ、16は手持ちヘラケズリで仕上げられている。17は4C-57区の住居跡上攪乱土層中からの出土品で、底部は中央部に糸切り痕を残し、周縁部に手持ちヘラケズリをおこなっている。

鉄釘 (P L. 14-1~4)

鉄釘は、基壇周辺を中心に調査区内の各地点から出土しており、一番長いもので15cm (P L. 14-3)、短いもので5cmほど (P L. 14-4)のものが18本ある。鉄釘には、木質等は付着していない。3は頭部に一辺3cmの四角板がついている。

スラッグ^{*} (P L. 14-18, 19)

41点ほど調査区内の各所から出土している。18はその中でも一番大きな椀形滓である。北側掘立柱群の西方3B-54区付近からは、破片は小さいが中の気泡もかなりこまかいものが多く出土しており、近くに製鉄遺構がある可能性もあろう。

* スラッグについては、穴沢義功氏から多くの助言を得た。

VI ま と め

1. 遺構

本廃寺跡の発掘調査は、重要遺跡の確認調査ということで、短期間の調査の為に、時間的にかなり制約があり本廃寺跡の全容を解明することができなかったことは、いうまでもない。しかし、調査が行なわれる前までは、瓦は表採できるものの、建物の有無、すなわち寺がほんとうにあったかどうかについてさえも不明であったのが、今回の調査で、しっかりしたつくりの基壇が発見され、寺が存在することが明らかになったことは大きな成果であった。

まず基壇は、その周囲を石や瓦等による化粧ではないものの、厚板で化粧したと思われる痕跡が発見されたことにより、その規模が東西14.8m、南北11.8mで中軸線が真北から東に13度ふれていると判明したことは非常に重要なことである。今まで千葉県内においても上総国分僧^{*}・尼寺跡及び真行寺廃寺跡^{***}でも、このような痕跡は確認されているが明確ではない。国分僧寺跡と真行寺廃寺跡では、断面の観察によってわかる程度であり、詳しいことは不明であるが、本廃寺跡と同じような、厚板を使用した可能性がある。しかし、両寺院跡の基壇は、瓦による壇上積の化粧をしており、本廃寺跡とは違う。尼寺跡では、まず掘り込み基壇を、予想される建物よりも大きめに構築し、その後で、その掘り込み基壇内に溝状の掘り方をつくり、そこに丸太棒が据えつけられていたとされている。しかも、最後にはその上に瓦積の基壇外装をおこなっているので、本廃寺跡の状況とは若干様相がちがう。この尼寺の場合には、基壇を構築する際に地表面より下部は、掘り込んでつくられた掘り方内に、新しい土を入れて搗きかためて構築すればよいが、地表面より上の部分を構築する為に盛り土がまわりに広がらないような土止め等をしなければならないであろう。この土止めとして丸太棒が据えられたと考える。であるから、基壇が完成した後には、その丸太棒は不用となり、とりはらわれ、あらためて、尼寺にふさわしい瓦積壇上基壇がつけられたので、地表面下の丸太棒の痕跡のみが残っていたの

* 滝口 宏 『上総国分寺跡』 千葉県教育委員会 昭和48年3月

** 宮本敬一 「上総国分尼寺跡(002) 北辺部の調査」『南向原』上総国分寺台調査団 昭和51年1月
なお、同じような例が但馬国分寺跡でも確認されている。

高井梯三郎他 『但馬国分寺跡』I 兵庫県城崎郡日高町教育委員会 昭和50年7月

*** 成東町真行寺廃寺跡の北基壇の北基壇外縁部瓦積みの外側で同様の溝が確認されており、断面の観察のみで、平面的には不明であるが、基壇築成作業に関係する遺構かもしれないとしている。

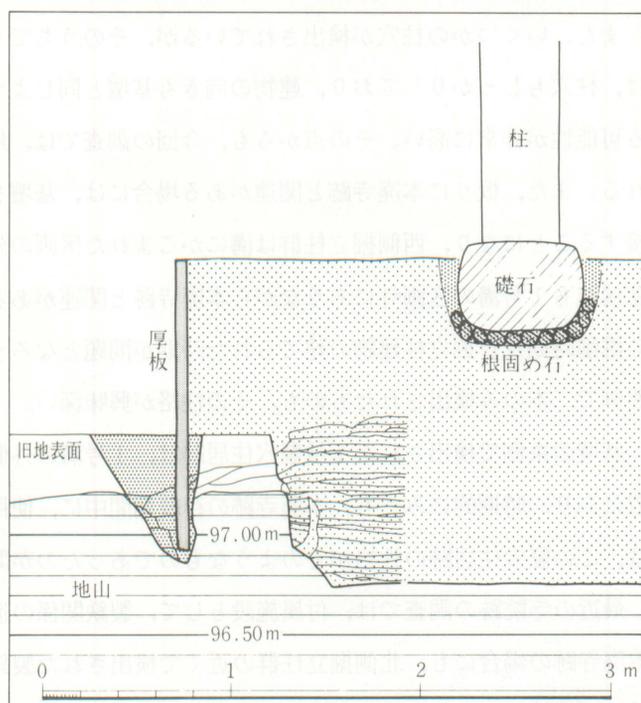
沼沢 豊他 『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会 昭和57年3月

また、南基壇でも版築の手法による基壇の外縁近くに溝が巡っていることが確認されており、北基壇と同様な溝の可能性はある。

滝口 宏他 『成東町真行寺廃寺跡発掘調査概報』 成東町教育委員会 昭和58年3月

であろうと考える。しかるに、本廃寺跡においては、基壇外装と思われる石・瓦等はまるでなく、しかも、掘り込み基壇の地表下は、予定される建物よりも大きめにつくるようなこともしていないので、尼寺の場合には、基壇構築の際の土止めと、基壇の外装は別々につくっているが、本廃寺跡は、それらとともに兼用できるような厚板を基壇まわりにめぐらしたものと考えられる。すなわち、基壇の外装は、いわゆる木造基壇外装^{*}であったのではないかと推測する。なお、この厚板を据える掘り方の断面形が、基壇側ではほぼ垂直で外側がややひらきぎみなのは、厚板をたてる^{**}為ではなく、厚板が基壇の土圧で外側にたおれないようにするために、掘り方の厚板外側部分を版築の手法により土を新しく入れて搗きかためる必要があったためと考える。また、国分僧寺講堂跡、国分尼寺講堂跡、真行寺廃寺跡北基壇・南基壇では、掘り込み基壇が予想される建物より大きめにつくられているので、基壇上部ないし外装にともなうかもしれないこれらの痕跡は、掘り込み基壇の縁より内側に検出されている。しかし、本廃寺跡の基壇では、最終的な基壇よりも小さめの掘り込み地業を行っているので、外装の為の痕跡は、基壇の縁より外で検出されている。すなわち、前者の基壇が丁寧に構築され、本廃寺跡の基壇は簡略化して構築されているといえる。

次に、基壇を巡る可能性のある溝であるが、この1号溝が基壇と



第3図 基壇外装模式図 (1:40)

* 越後国横滝山廃寺跡でも、本廃寺跡の痕跡と非常によく似た痕跡が発見され、基壇外装の痕跡と考えられている。本廃寺跡でも、これを参考に同様に考えた。

寺村光晴・上野邦一 『横滝山廃寺跡発掘調査概報 第1次調査～第4次調査』 寺泊町教育委員会 昭和57～60年

なお、中でも平泉毛越寺や鎌倉永福寺跡にも同様の外装があるとされており、最近の永福寺跡の調査でも明らかとなり、円隆寺左右廊・講堂の基壇と同じように、いわゆる木製壇上積基壇の痕跡が二階堂・廊・阿弥陀堂で確認された。しかし、これらの例は、木造の壇上積の基壇であり、本廃寺跡や横滝山廃寺跡の例とはちがう。

藤島亥治郎他 『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』 東京大学出版会 昭和36年3月
馬淵和雄 「鎌倉永福寺とその苑池」 『佛教藝術』 164 毎日新聞社 昭和61年1月

** 上野邦一氏が『横滝山廃寺跡 第4次調査』で述べている。

関係のあるものとした場合に、溝によって区画された空間の中央に基壇をつくらずになぜ東側の部分に寄せたのかが問題となろう。もしかすると、今回の調査では判明しなかったが、あいっている西側部分にもなにか重要な建物でもあるのかもしれない。しかし、仮りにこの1号溝が本廃寺跡の寺域を画するような性格の溝であり、今回の調査で発見された基壇がこの寺院の中で中心的な建物部であったとしても、このように寺域の中央に中心的な建物を建てない例もないことはないので、おかしくはなからう。すなわち、大和法華寺等をひきあいにだすまでもなく、上総国分尼寺跡がそうである。^{*} いずれにしても、本廃寺跡の調査がさらに進めば、1号溝が基壇と関係のあるものなのか、溝で区画された基壇の西側部分にも別の施設があったのかわかるであろう。

また、いくつかの柱穴が検出されているが、そのうちでも特に基壇の北及び西側の掘立柱群は、柱穴もしっかりしており、建物の向きも基壇と同じようであり、本廃寺跡の関連施設である可能性が非常に高い。その点からも、今回の調査では、規模等がわからなかった点がぐやまれる。また、仮りに本廃寺跡と関連がある場合には、基壇をとりまく1号溝と北側掘立柱群は接することになり、西側掘立柱群は溝にかこまれた区画の外になる点が気になるが、1号堅穴住居跡も1号溝の区画外にありながら本廃寺跡と関連がある可能性があり、今後、この1号溝の掘削時期及び掘立柱建物の建てられた時期が問題となろう。柱穴としては、この他に基壇の西側で二本のみ検出されたものも、その性格が興味深い。

基壇の東側で検出された1号堅穴住居跡は、1号溝の外側ではあるが、基壇に非常に近い位置にあり、時期的にみても、本廃寺跡の存続期間中に、使用された可能性が高い、その場合には、この堅穴住居跡の性格がどのようなものであったのか問題となろう。

最近の寺院跡の調査では、付属施設として、製鉄関係の遺構が検出されることも多い^{**}ようで、本廃寺跡の場合にも、北側掘立柱群の近くで検出された製鉄に関連すると思われる遺構等がその可能性もある。これらの掘立柱建物跡や1号堅穴住居跡、製鉄跡、及び若干距離ははなれるが荻生道遺跡等が一つとなって、本廃寺が運営されていたとも考えられ、古代寺院の機能及び組織等のあり方を考える上でも参考となろう。

* 宮本敬一氏によれば、『平城京内の官寺では、伽藍中心線が寺地の西側3分の1のところになされる例が多く、一般に寺院や宮殿が対称性を重んじることから中央に来ることも少なくないが、大和法華寺では寺地の西側5分の2のところを伽藍中心線が通っていたようである。上総国分尼寺のA期伽藍も同様で、ほかに例のないことではないにしても、注目される共通点である。』とされている。

宮本敬一 「上総国分尼寺の伽藍と付属諸院 (3)」 『月刊歴史教育』 第32号 東京法令出版 昭和58年11月

** 真行寺廃寺跡では製鉄遺構が確認され、二日市場廃寺跡の調査でもスラッグが出土している。

沼沢 豊他 『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』 財団法人 千葉県文化センター 昭和58年3月

郷堀英司他 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』 千葉県教育委員会 昭和59年3月

2. 遺物

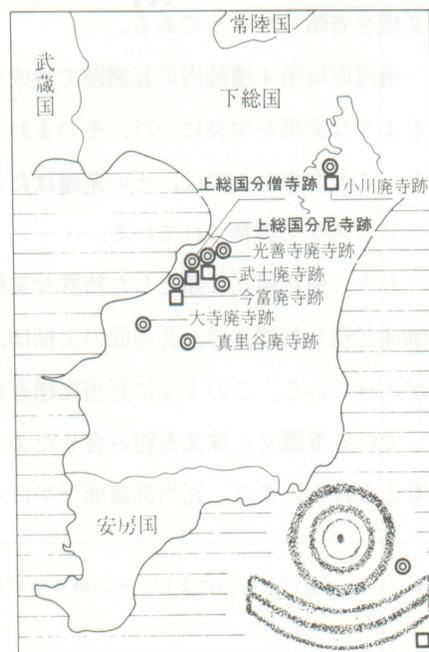
遺物は、瓦をはじめ須恵器・土師器・スラッグ等もあるが、ここでは瓦を中心に考えてみたい。

本廃寺跡が創建された時に、基壇上の建物の軒先を飾った瓦の中に上総国分僧・尼寺創建期の鏡瓦及び宇瓦と同じ文様の軒先瓦鏡瓦Ⅰ類と宇瓦Ⅰ類があったことは、まちがいなかろう。しかし、本廃寺跡のように、国分寺創建期の軒先瓦を所用するのは、かならずしも本廃寺跡に限ったことではなく、他の寺院跡からも、出土している（第5図参照）が、国分寺周辺外の寺院跡では、本廃寺跡が唯一の例であろう。これは、国分寺の補修用重圏文鏡瓦の系統の瓦が旧上総国内の各地の寺院跡でも用いられた（第6図参照）のとくらべると対照的であり、本廃寺跡の性格を知る上で重要な事実であろう。またこの国分寺創建期の軒先瓦の生産地であるが、現在までのところ、市原市神門瓦窯跡と同市川焼瓦窯跡^{**}が知られているにすぎない。しかし、南河原坂第4遺跡からも窯内からの出土品ではないが、国分寺創建期の鏡瓦が出土しており、未調査の窯跡があることも考えると、今の段階では、本廃寺出土鏡瓦Ⅰ類・宇瓦Ⅰ類の生産地は限定できない。なお、この種の軒先瓦は、本廃寺跡出土品、国分寺跡出土品、その他瓦窯跡出土品等をくらべると、肉眼の観察では、焼成・胎土等非常によく似ており、国分寺跡出土品の宇瓦と本廃寺跡出土のものには同範関係にあるものがあることをつけ加えておく。

さて次に、国分僧寺跡から出土している宇瓦の文様を反転させた、本廃寺跡出土宇瓦Ⅱ類を検討してみた



第4図 上総国分寺創建期軒先瓦の分布



第5図 上総国分寺重圏文系軒先瓦の分布

* 平野元三郎 「十三坊池と雷電池」 『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書』(1) (市原遺跡発掘調査概報) 昭和24年

** 瓦窯跡本体の発掘調査は行われていないが、窯壁を確認しており、近くから上総国分寺創建期の軒先瓦が表採されている。

*** 上総国分尼寺跡からは、今のところ出土していない。

い。本廃寺跡出土宇瓦II類は、瓦当文様で比べると、僧寺跡出土品の大きさを100とした場合に80*ぐらいである。この点については、どのような範及び文様のつけ方をしたかが問題となるところであるが、文様が全体に均一に小さくなっている点からみて、粘土を焼成すると、焼く前よりも縮小することが原因かと思われる。瓦当文様は、普通突出した文様として表現される。それは、範に文様が彫られるからで、できあがった瓦当文様が窪んで現わされているということは、範の文様が突出していたということである。仮りに、文様の彫り窪められた普通の範から、本廃寺跡出土宇瓦II類のような瓦当文様をつくるとすれば、文様の転写を二度くりかえさねばならない。それを一度ですます為には、文様部分を彫り残した範をつくらねばならないことになる。いずれにしても、文様そのものは、僧寺跡の出土のものと同廃寺跡出土のものは、ネガとポジの関係にあることはまちがいない。瓦当面の周縁は、平らに終るものと、せまい段の周縁がつくものがある。宇瓦左端には僧寺跡出土瓦にはない三角形に凹んだ部分があるが、これは範にした瓦にあったものなのか、この範特有のものかは不明である。また、瓦当面の文様が若干ズレているものもあるが、これも範の性質によるものなのであろうか。瓦当面に縄タタキが施されているものには、そのような部分はない。この瓦当面に縄タタキをもつ宇瓦の中で文様がないものもあるが、顎等のつくりは、文様があるものとまるで同じであり、ただ瓦当面の文様を省略したようである。***

南河原坂第4遺跡内の瓦窯跡で焼成した、本廃寺跡出土宇瓦II類は、瓦当面を上下に分割するような突帯を中央につけ、そのまわりには、唐草文を分解したものか、特殊な文様の瓦であり、この文様からでは、その系譜はたどれない。なお、顎のつくりは、明らかに段顎であり、ヘラケズリで調整されている。

もう一種類鏡瓦II類とした特殊な文様の瓦がある。瓦当裏面の下半部分にも男瓦の一部を3cmほど残した鏡瓦で、瓦当面の文様は、重圏文の間に珠文及び放射状に瓦当面を分割する縦帯が入っている。このように瓦当文様を重圏文と珠文とにわけて考えると、国分僧寺跡から出土している重圏文と珠文を組み合わせたような宇瓦と、重圏文の鏡瓦をミックスした独自の意匠と考えられる。また、瓦当部裏面下半にも若干男瓦部を残している鏡瓦は、他にも出土している

* 瓦は、ものにより、その焼きひずみの割合がちがうので、比較する部位によってもこの数値は若干ちがう。

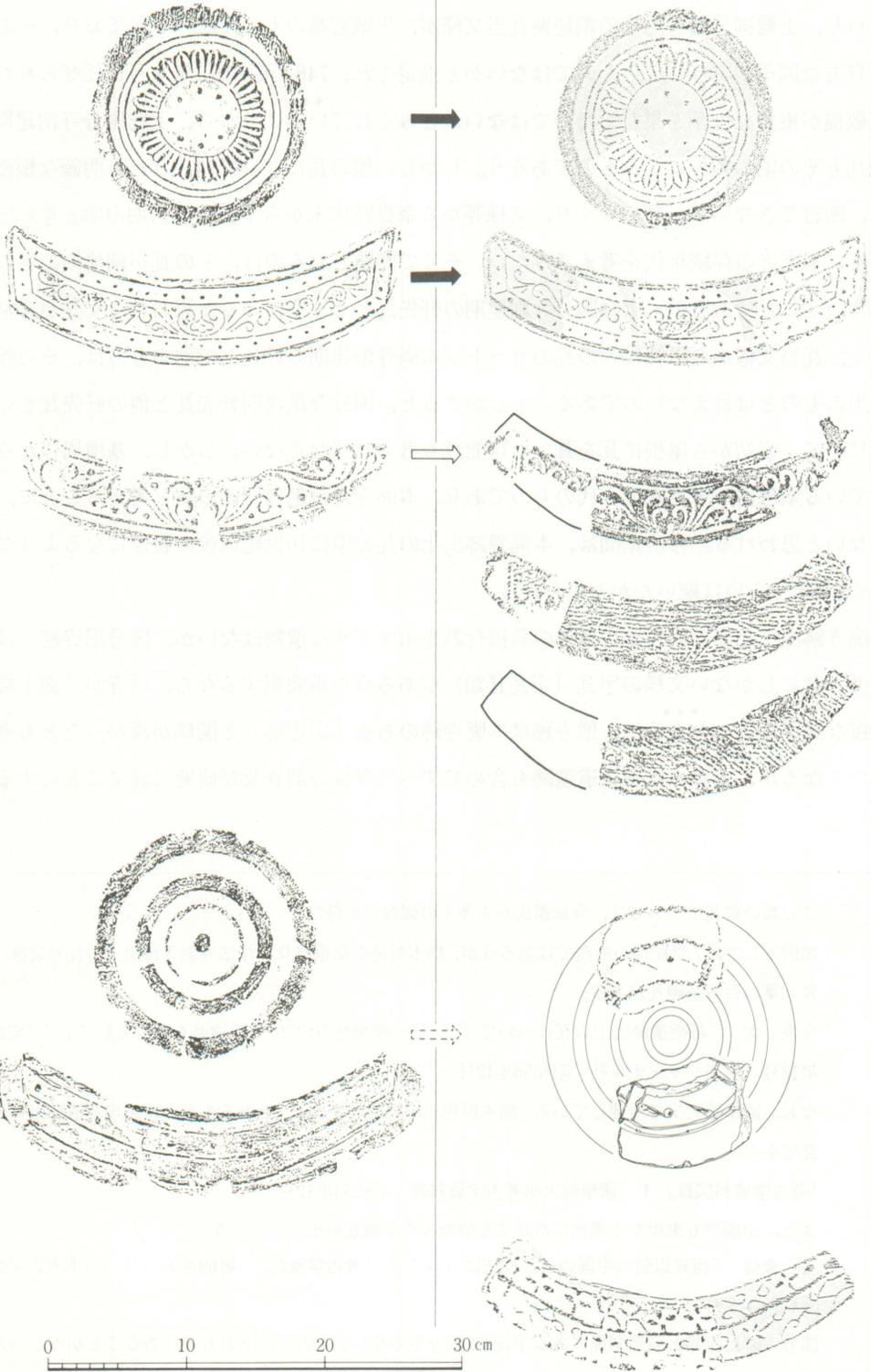
** 下記の文献では、実例をもとにその縮少率を10~15%と想定している。

滝本正志 「平瓦桶巻作りにおける一考察」 『考古学雑誌』 第69巻第2号 日本考古学会 昭和58年12月

*** 先にあげた窯跡の他に、瓦も焼いている千葉市金親町の中原窯跡等もあり生産地の限定はむずかしい。
倉田義広 「千葉市内の平安時代窯跡について」 『貝塚博物館紀要』 第10号 千葉市加曾利貝塚博物館 昭和58年3月

上総国分僧寺

小食土廃寺



第6図 小食土廃寺所用瓦の系譜

(1:5)

がなによえに瓦当面の裏面下半に男瓦の一部がついているのか判然とし^{*}ない。

さて、瓦の年代であるが、鏡瓦 I 類及び宇瓦 I 類は、上総国分寺の創建期頃のものであ^{**}らう。すなわち、上総国分僧・尼寺の創建期瓦当文様が、平城宮系のもので統一されており、その採用に有力な国司が関与していたのではないかと推定され、746 (天平16) 年4月に任ぜられた百濟王敬福が重要な役割を果たしたのではないかとみられていることから、上総国分寺創建期^{***}の軒先瓦もその頃の製作になるものであ^{**}らう。しかし、他の瓦については、どれも明確な根拠がなく、断言できないが、顎のつくり、文様等から奈良時代末から平安時代初期の頃と考えたい。

最後に本廃寺の存続年代を考えてみたい。そこで問題となるのは、どの瓦が創建期のものなのかということであるが、上総国分寺創建期の軒先瓦とセットになると思われる女瓦が非常に少なく、瓦当文様から単純にこの瓦のセットが本廃寺創建期の軒先瓦で他のものは、その後の補修用のものとは言えないのである。もしかすると、国分寺創建期軒先瓦と他の軒先瓦をいっしょにして、当初から屋根に瓦を葺いた可能性も考えねばならない。しかし、基壇周辺から出土している須恵器も8世紀後半代のものであり、本廃寺跡の創建がその頃と考えることに、問題はな^{**}いと思われる。存続期間は、本廃寺跡出土の瓦の中に10世紀以後の製作になるような瓦はなく100年ぐら^{**}いは続いたかと思われる。

本廃寺跡出土品に、明らかに僧寺の負担行為を示すような遺物はないが、国分尼寺跡にはなく、僧寺跡にしかない文様の宇瓦 (宇瓦 II 類) がある点を重要視するなら、尼寺が「海上郡」と密接な関係にあ^{***}ったように、僧寺跡は本廃寺跡のある「山辺郡」と関係が深かったとも考えてみたくなるが、それらは荻生道遺跡も含めてすべて今後の調査及び研究に託すことにする。

* この類の鏡瓦については、今泉潔氏から多くの御教示を得た。
類例として、7世紀代の所産ではあ^{**}らうが、栃木県尾の草遺跡及び浄法寺廃寺跡出土の瓦当文様が単弁八葉の百濟系鏡瓦がある。

今泉 潔 「郡衙遺跡出土の瓦について (下) —— 関東地方の2・3の遺跡を中心として」 『史館』
第13号 市川ジャーナル社 昭和56年12月

なお、國學院大學で所蔵している「栃木県那須郡馬頭大字小口」とあるものも、尾の草遺跡出土の鏡瓦である。

『考古学資料図録』 I 國學院大學考古学資料館 昭和53年12月

また、中国でも東周から漢代にかけても似たような鏡瓦が出土している。

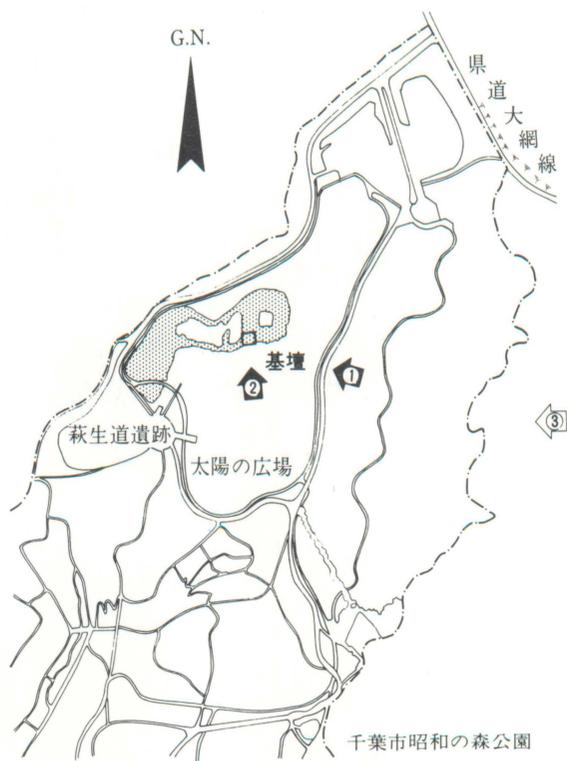
谷 豊信 「西晋以前の中国の造瓦技法について」 『考古学雑誌』 第69巻第3号 日本考古学会
昭和59年3月

** 国分寺跡出土品と同範関係にある宇瓦が、国分寺のなかでも古い段階のものであることからいえる。

*** 宮本敬一 「上総国分尼寺の伽藍と付属諸院 (3)・(4)」 『月刊歴史教育』 第32号・第33号、東京法令出版 昭和58年11月・12月

図版・図面

1. 遺構写真の Plate 番号は、対向ページの実測図にも及ぶこととする。ただし、写真番号と実測図番号はかならずしも同じ遺構を示すとはかぎらない。
2. 遺物写真の Plate 番号は、対向ページの実測図にもおよぶこととする。ただし、写真をかかげず実測図のみをしめすもの、実測図をかかげず写真のみをしめすものもある。
3. 遺構写真の撮影方向は、対向ページに示した。



1. 遠景
西から

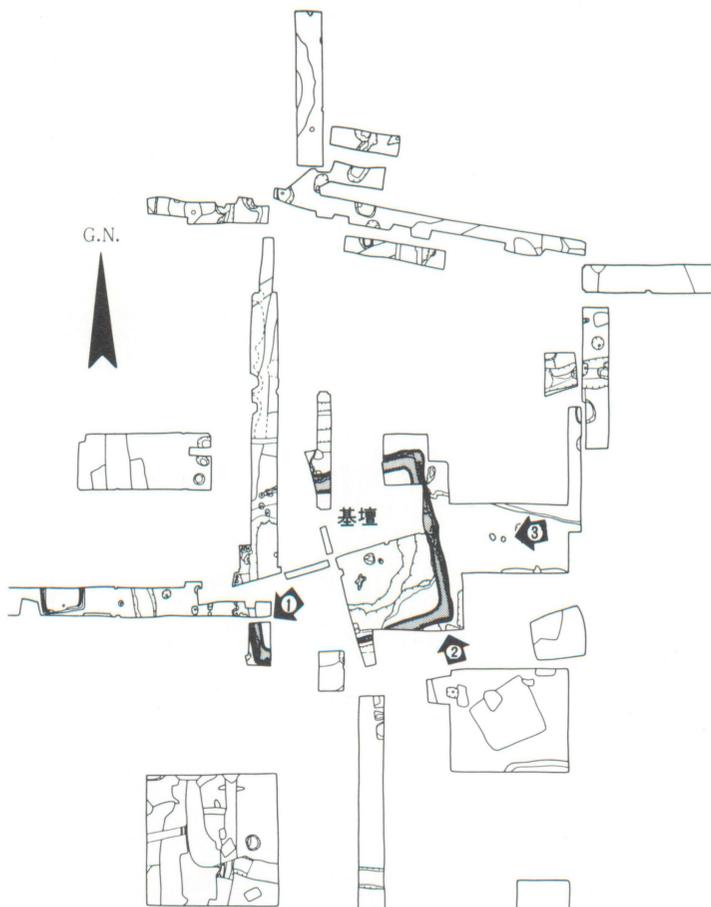


2. 近景
南から

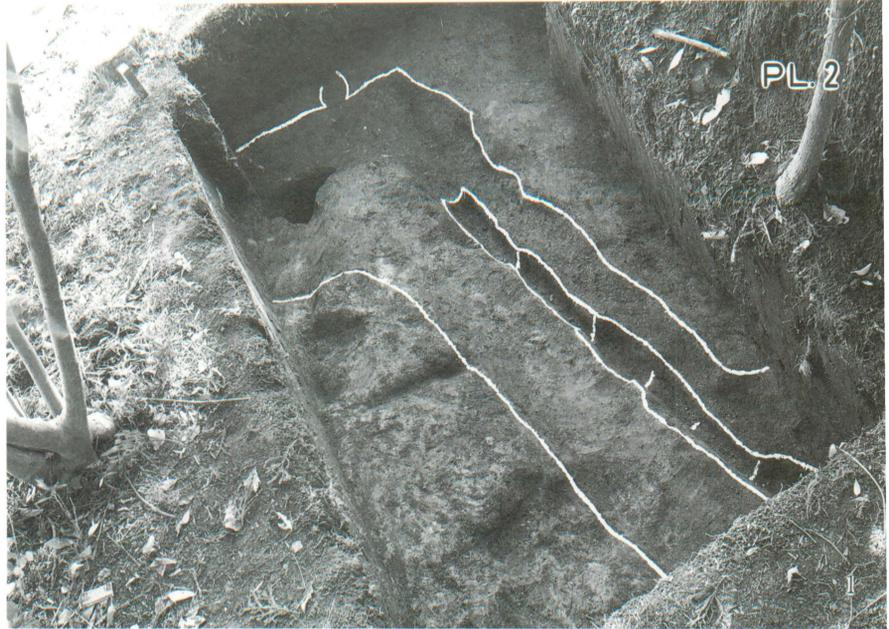


3. 空からみた
小食土廃寺跡周辺の地形

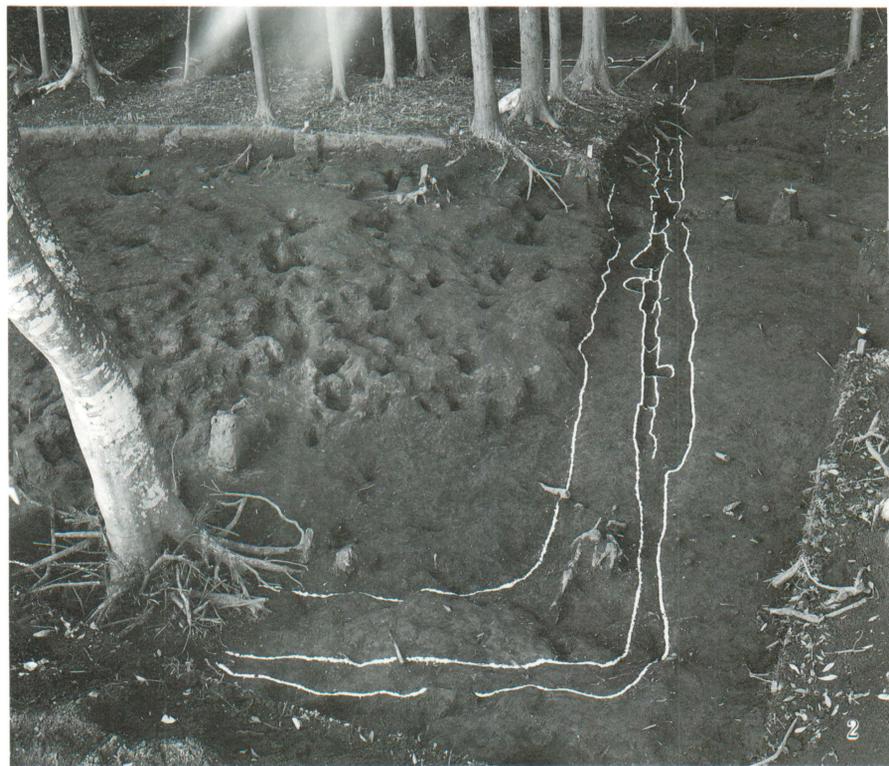




1. 南西隅
北西から

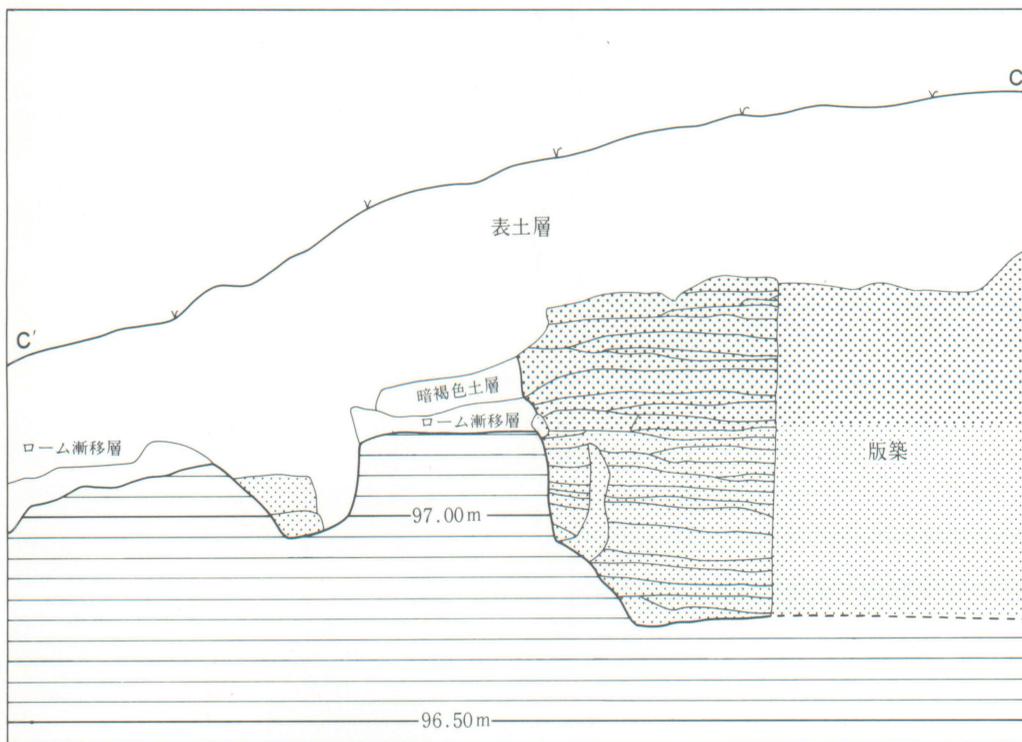


2. 西側
南から

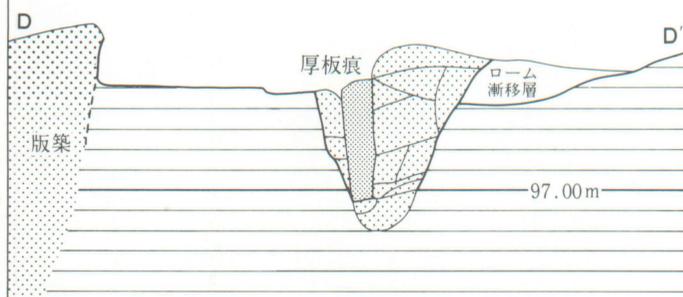


3. 全景
西から

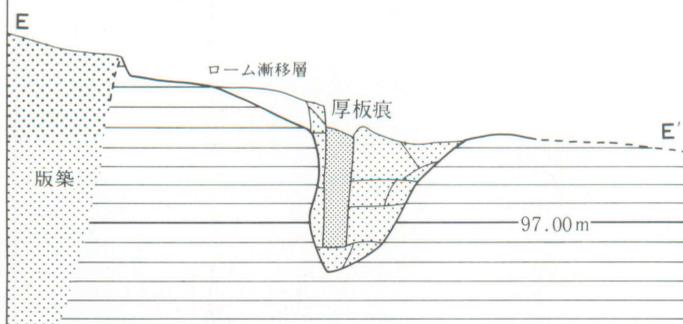




第1図 基壇南側土層断面図



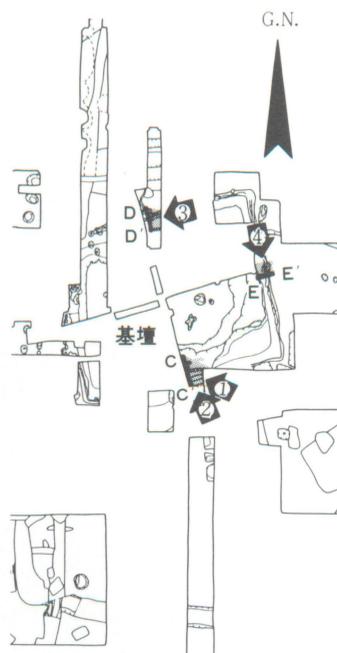
第2図 北側外装部土層断面図



第3図 西側外装部土層断面図



1:40



1. 基壇土層断面
南東から

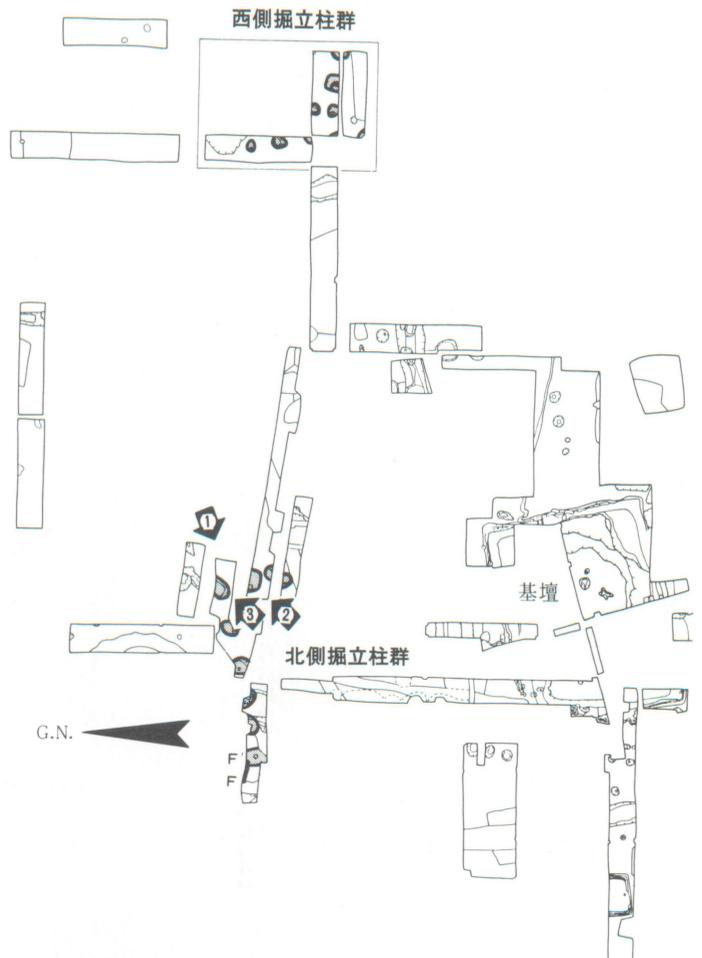
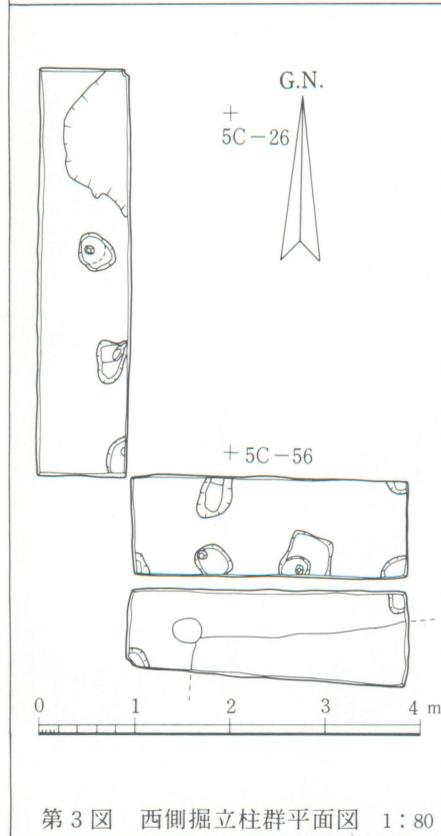
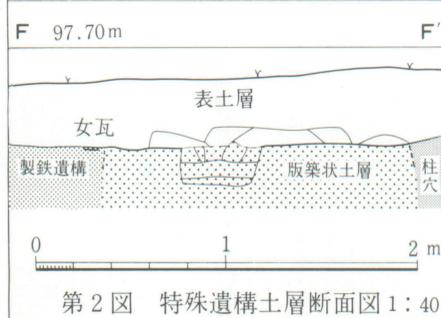
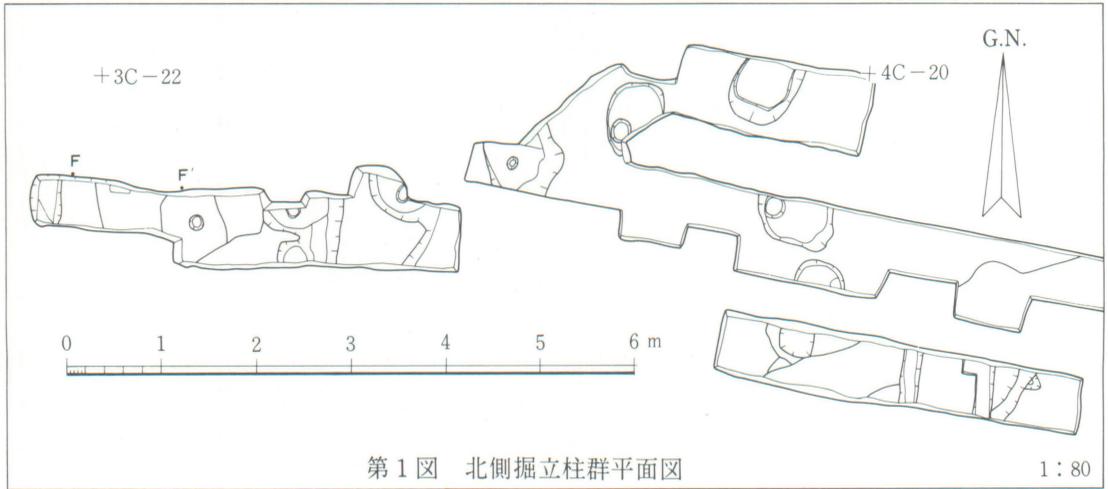


2. 版築状況
南から

3. 外装基部
土層断面
北から

4. 外装厚板痕
西から





掘立柱群

PL.4



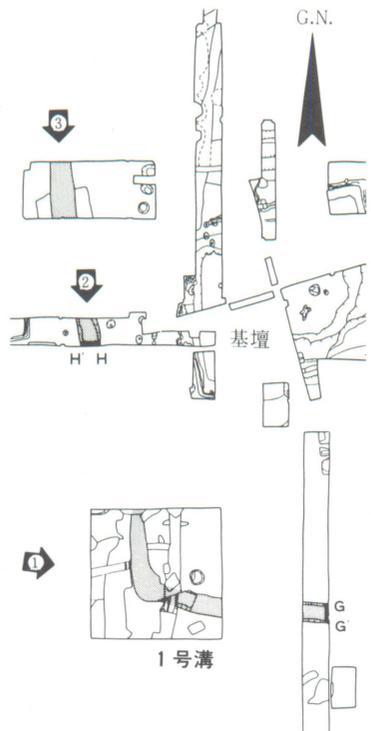
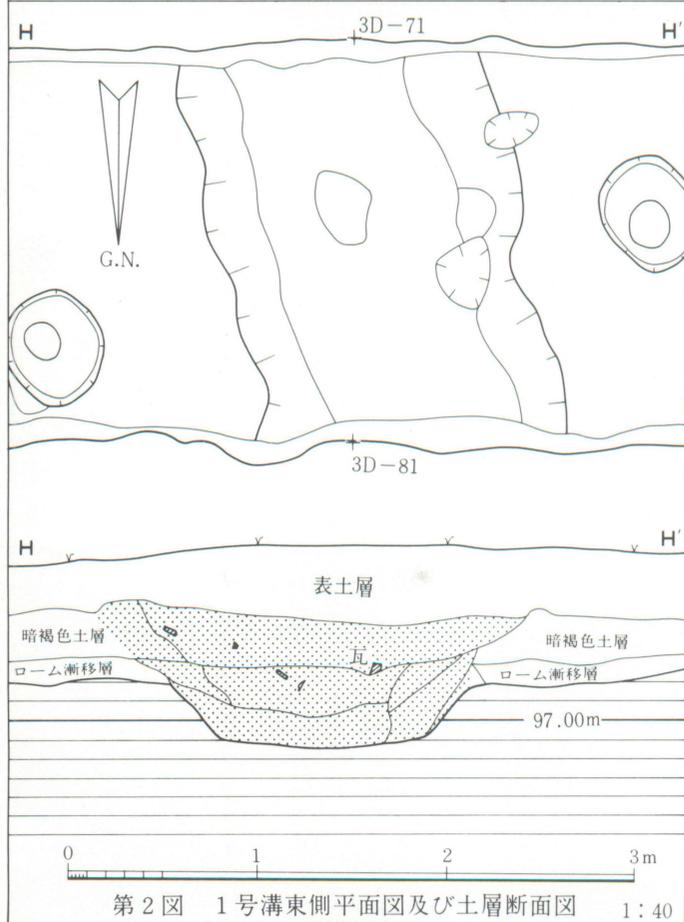
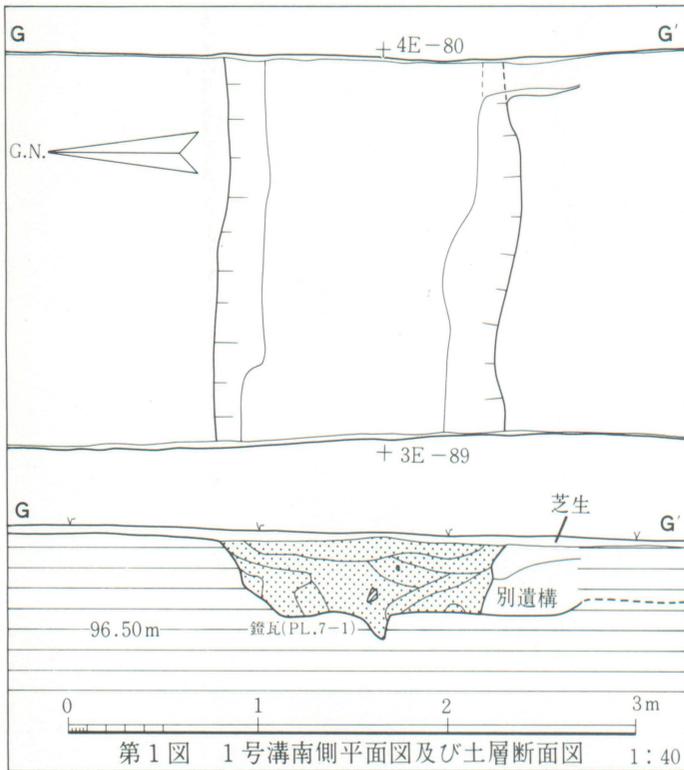
1. 北側掘立柱群
北西から



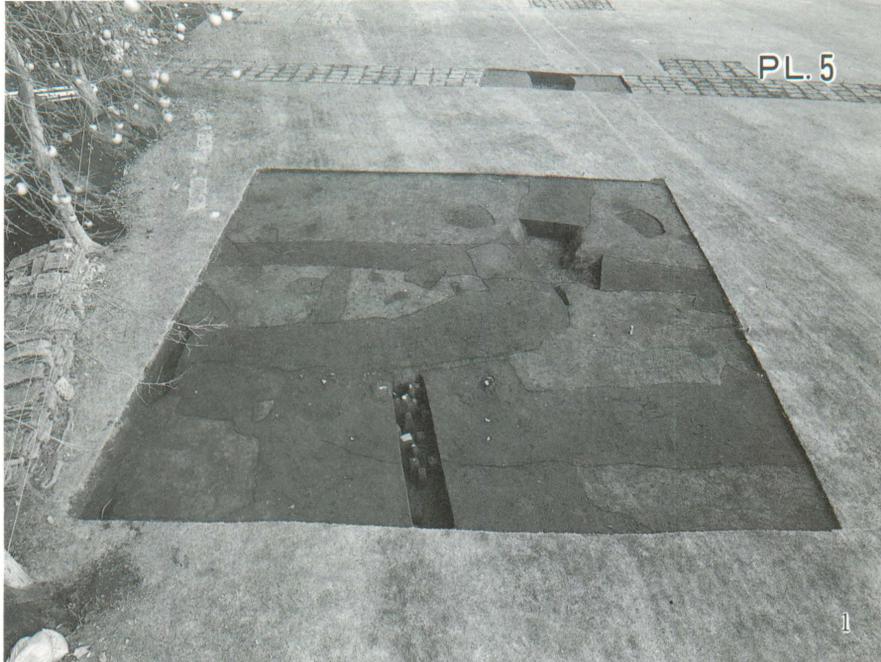
2. 掘立柱穴土層
断面
南から



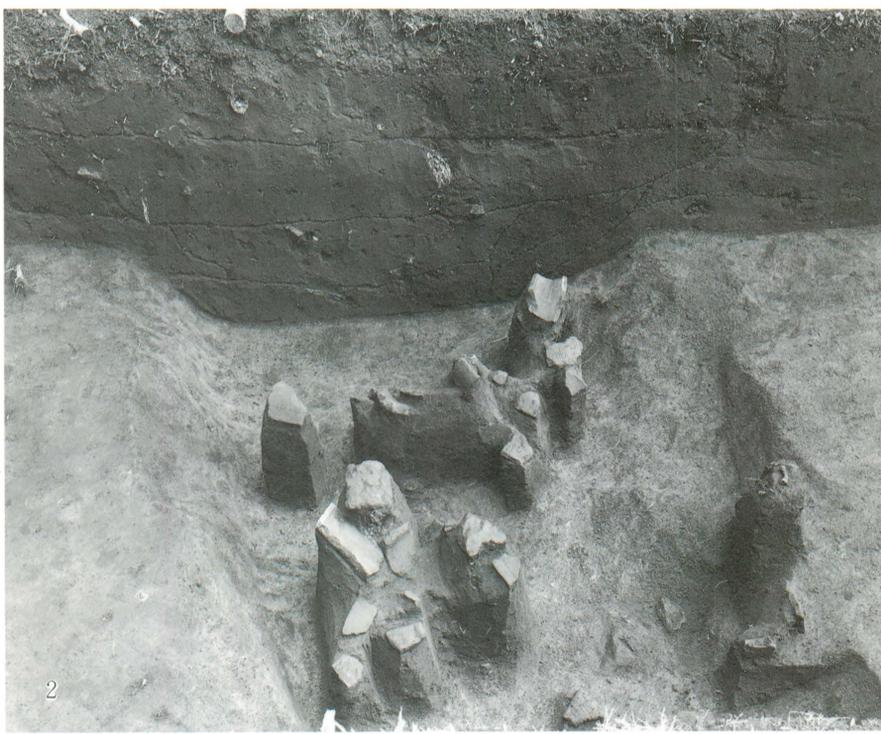
3. 掘立柱上面
遺物出土状況
東から



1. 南部分
東から

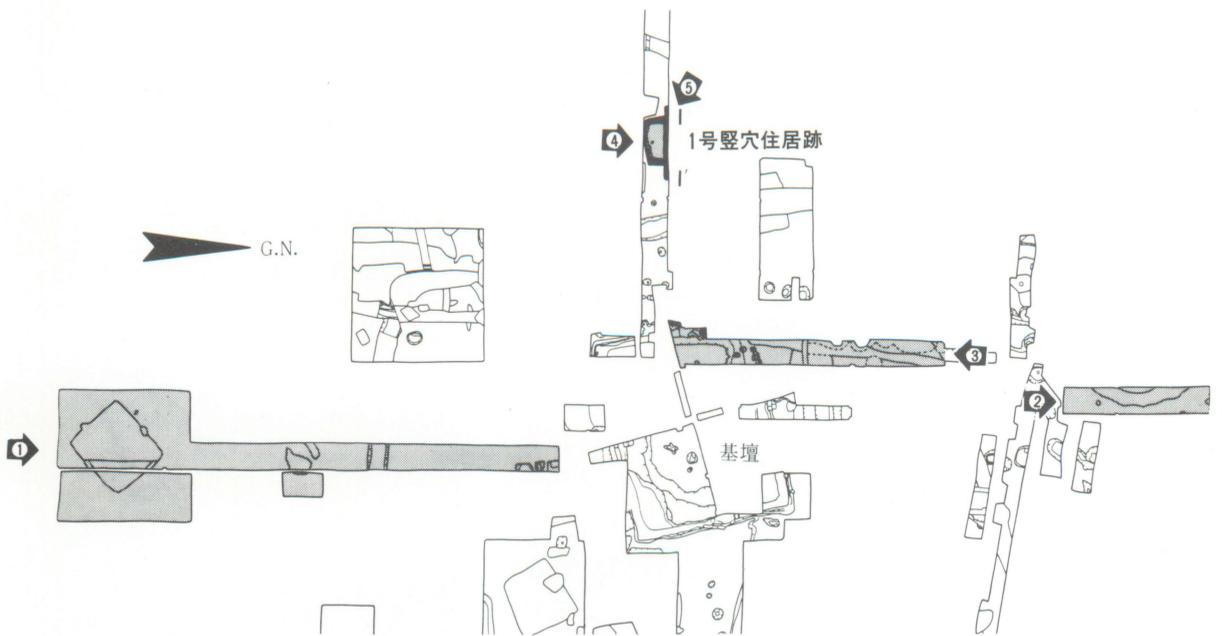
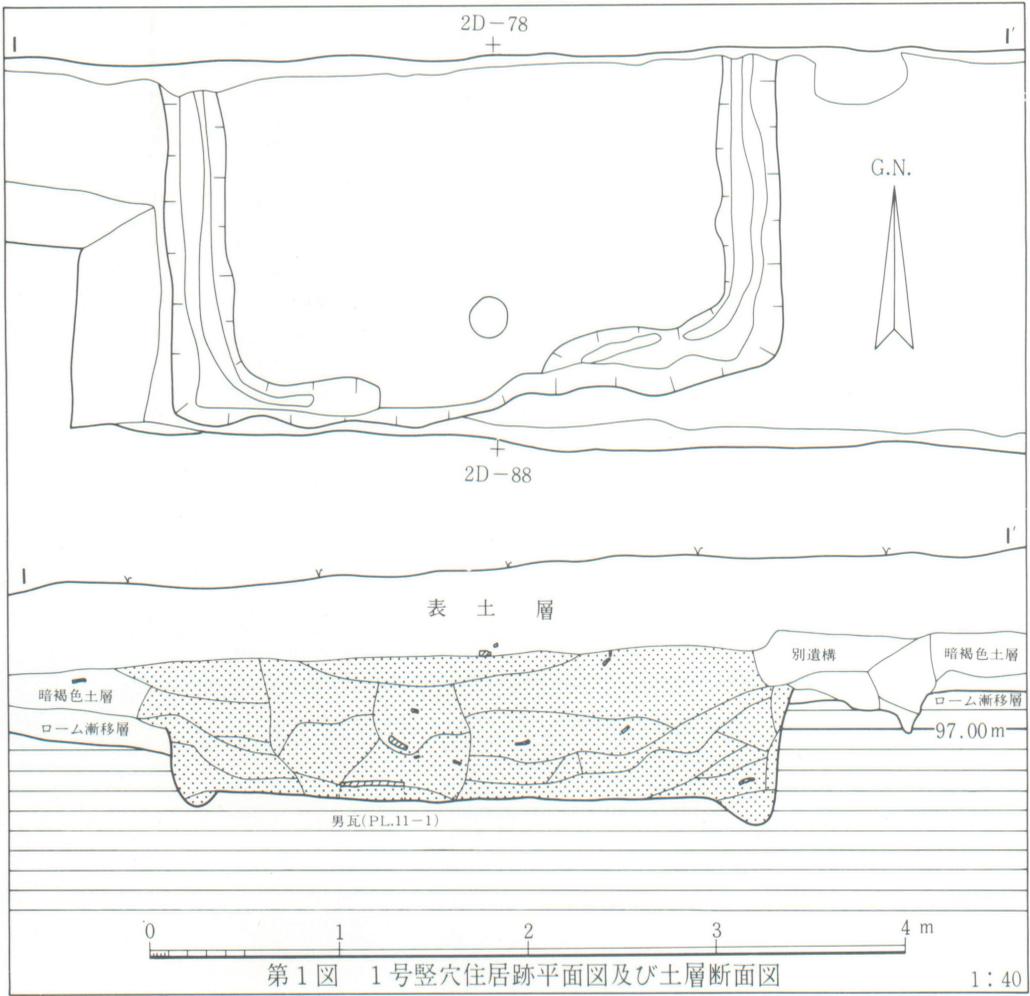


2. 土層断面
北から



3. 遺物出土状況
北から

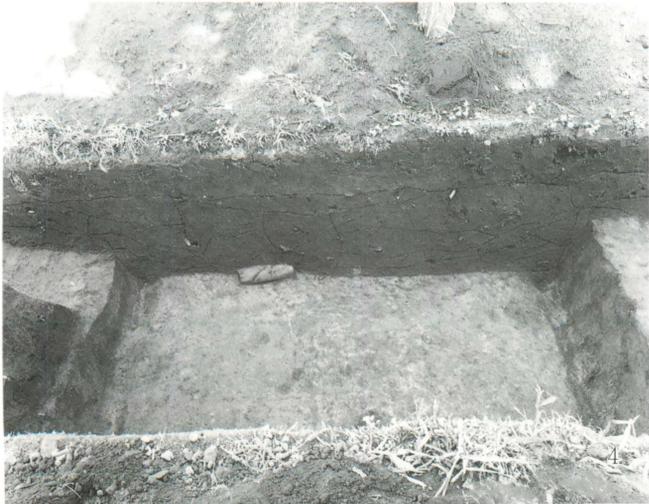
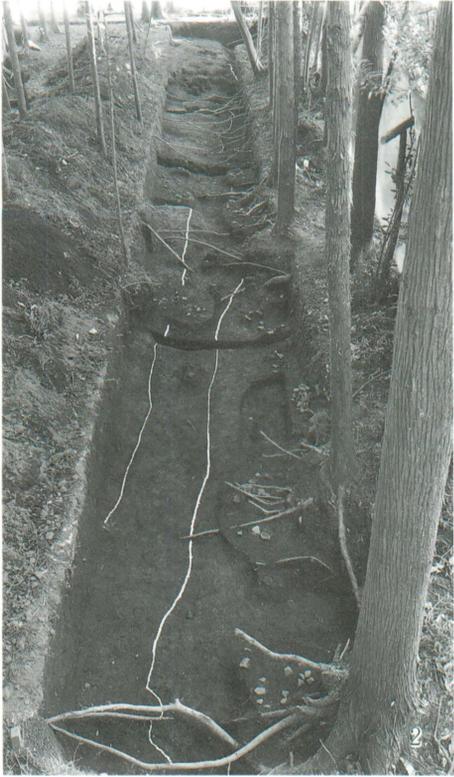
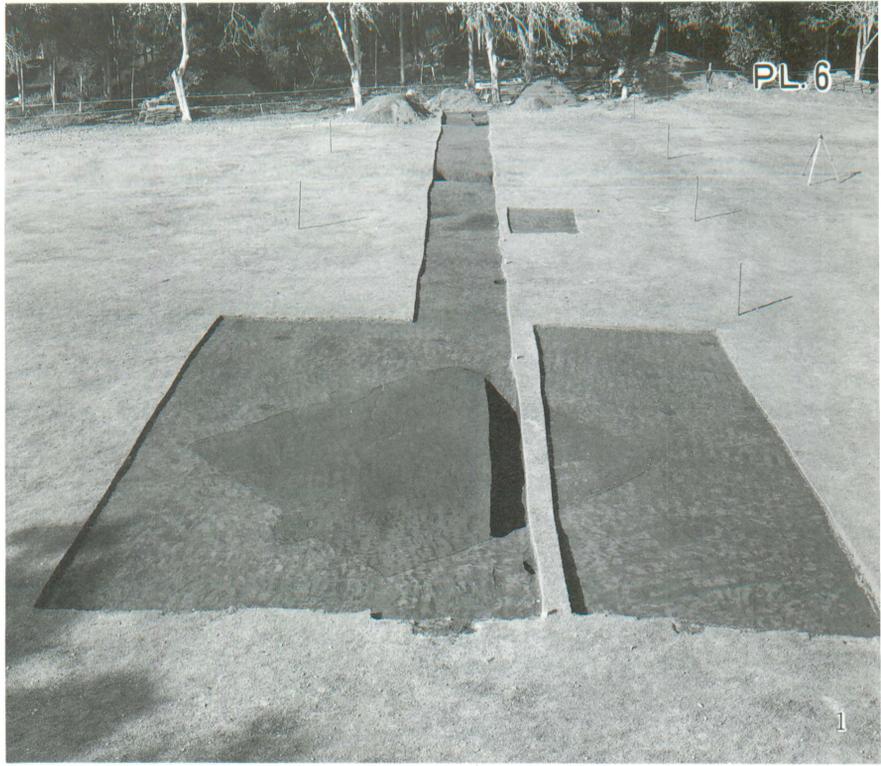


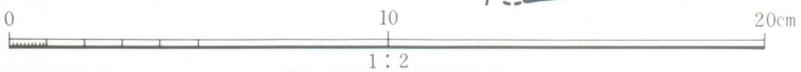
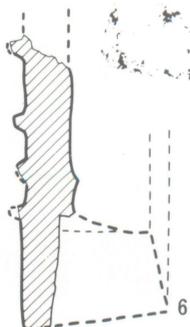
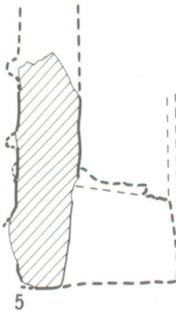
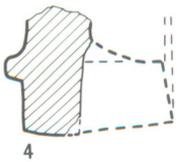
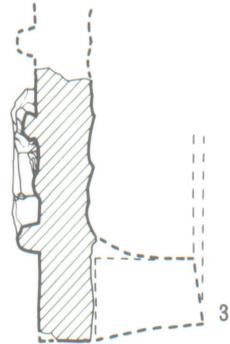
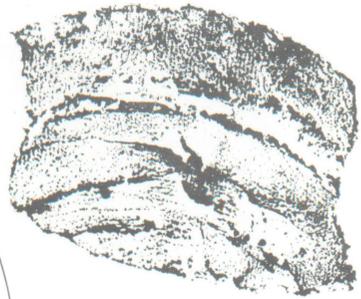
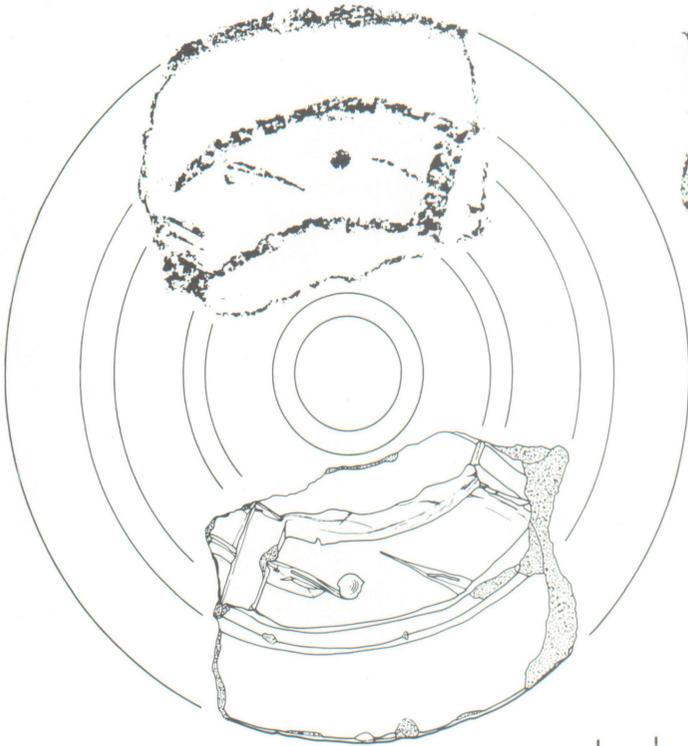
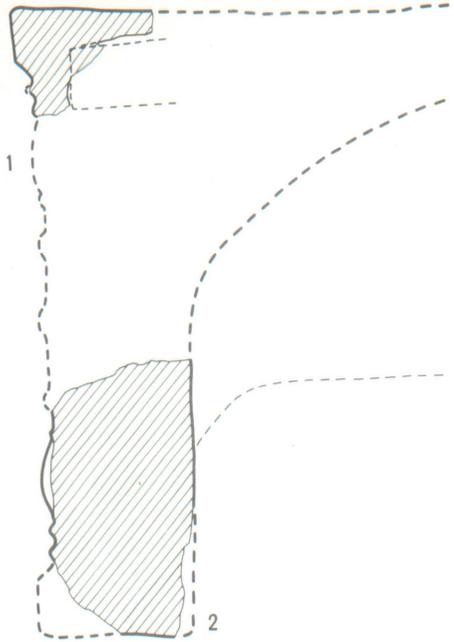
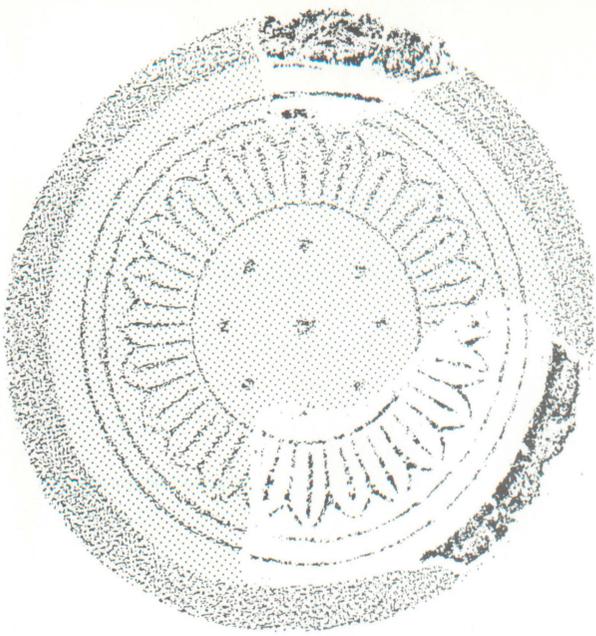


1号竖穴住居跡他

PL.6

1. 基壇南方トレンチ
南から
2. 基壇東側北トレンチ
北から
3. 基壇北方トレンチ
南から
4. 1号竖穴住居跡全景
南から
5. 1号竖穴住居跡
遺物出土状況
東から







1



2



6



5



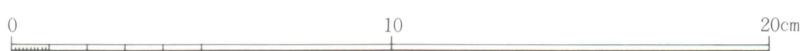
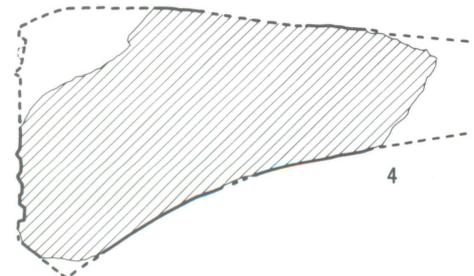
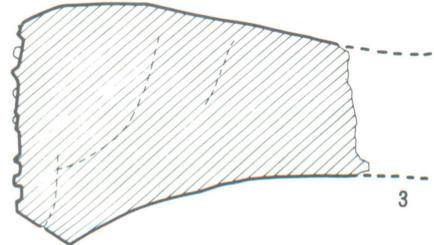
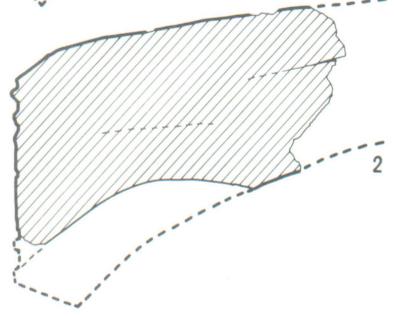
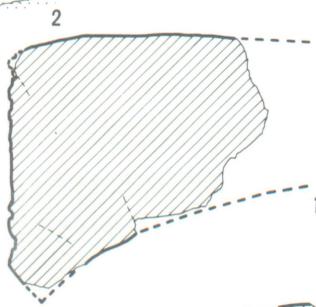
3



7



4



1 : 2



4



3



5



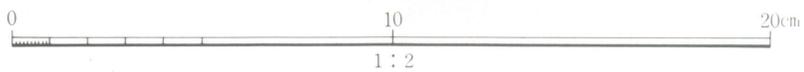
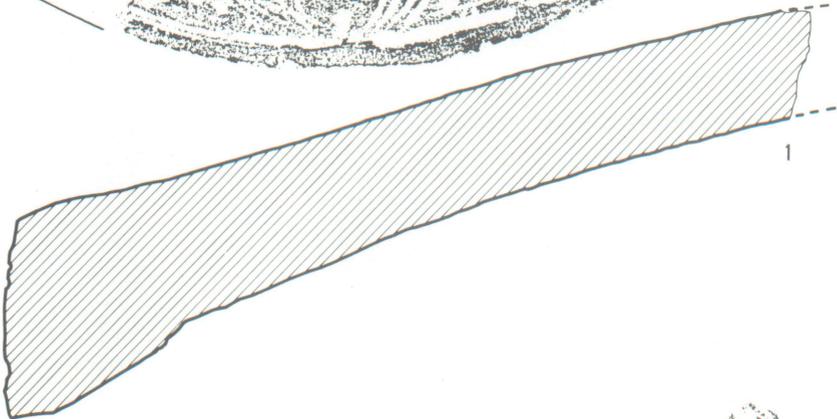
2



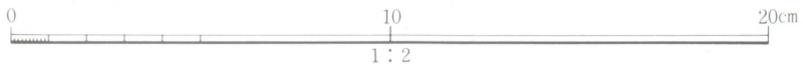
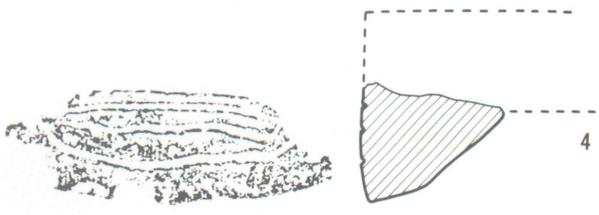
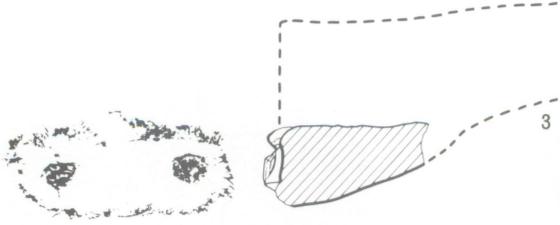
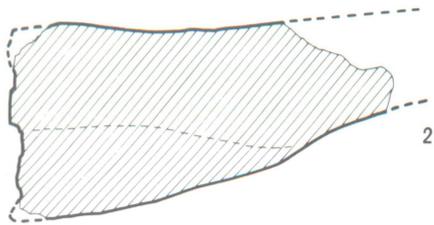
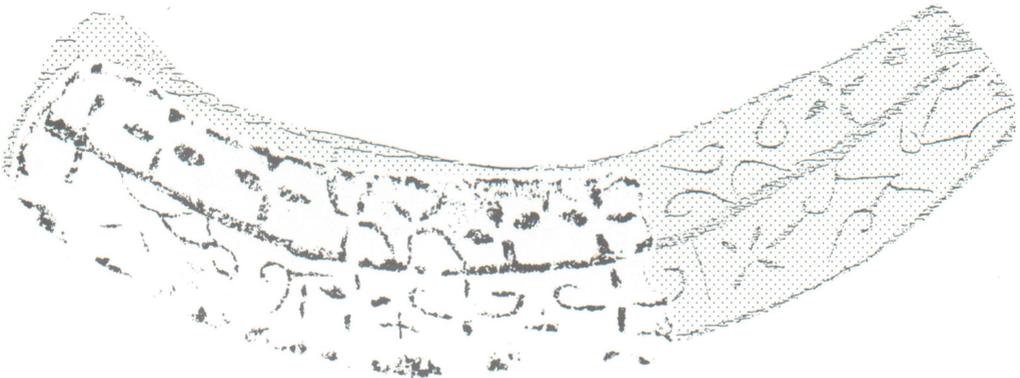
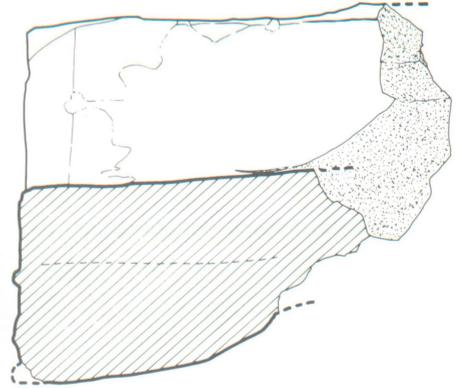
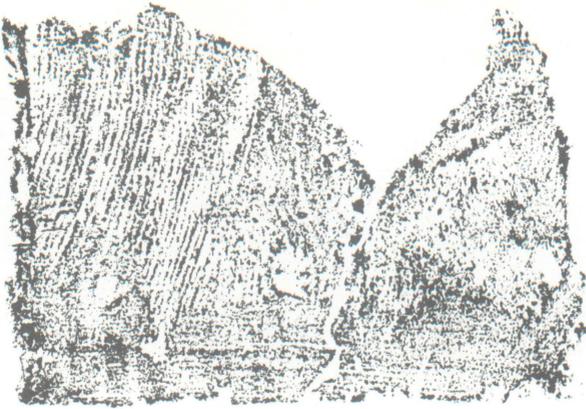
1:2 1:1

1 1:1

6









5

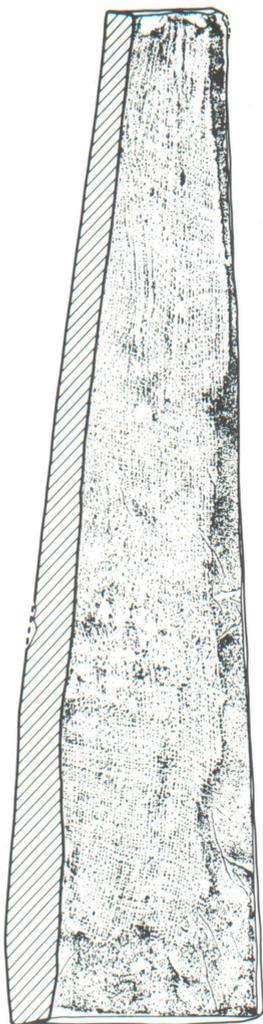
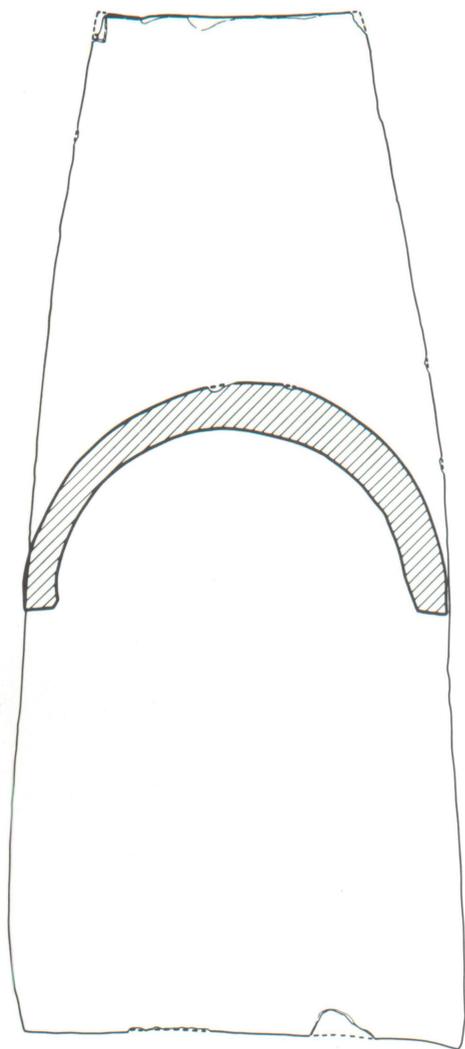
6

3

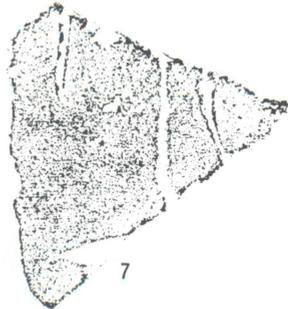
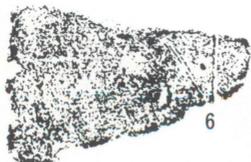
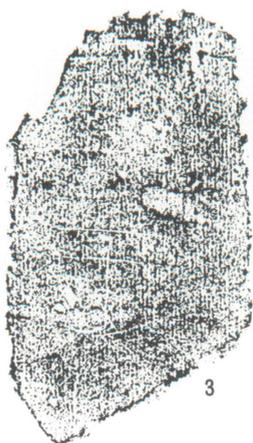
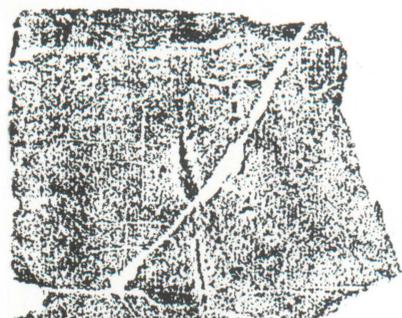
4

1

2



1 : 3



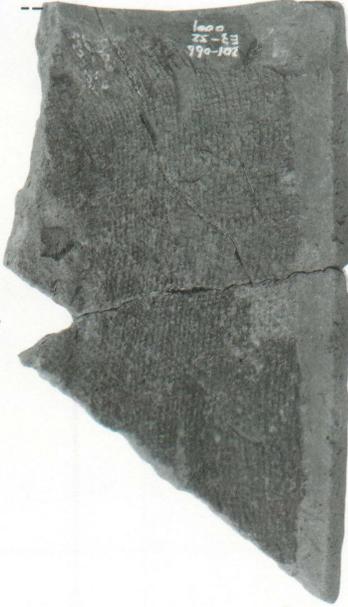
1 : 2



1



1:2

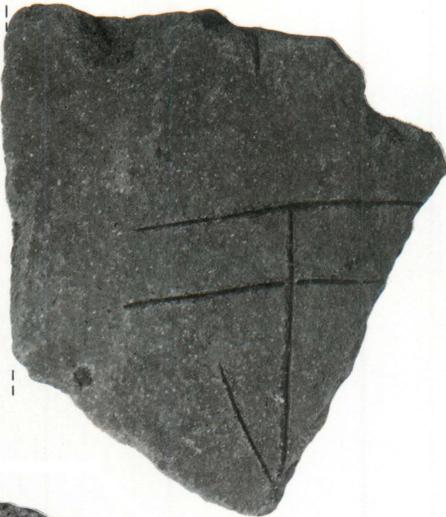


2



3

4



6



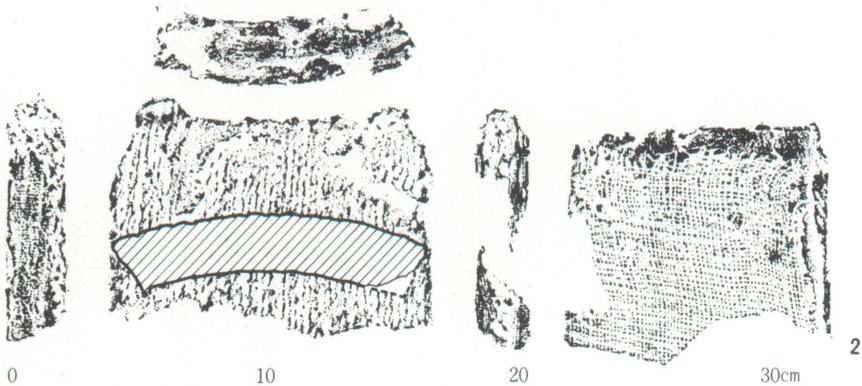
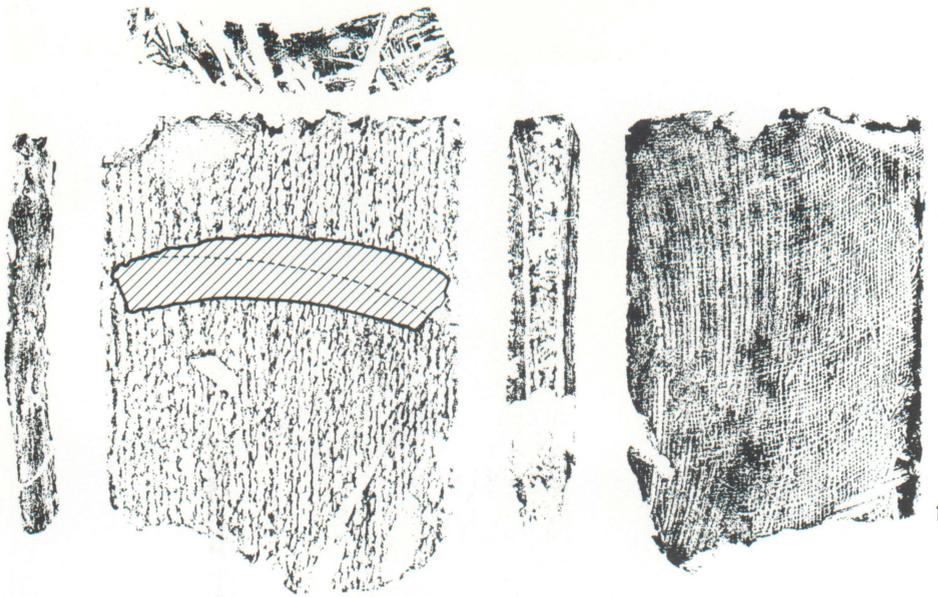
7



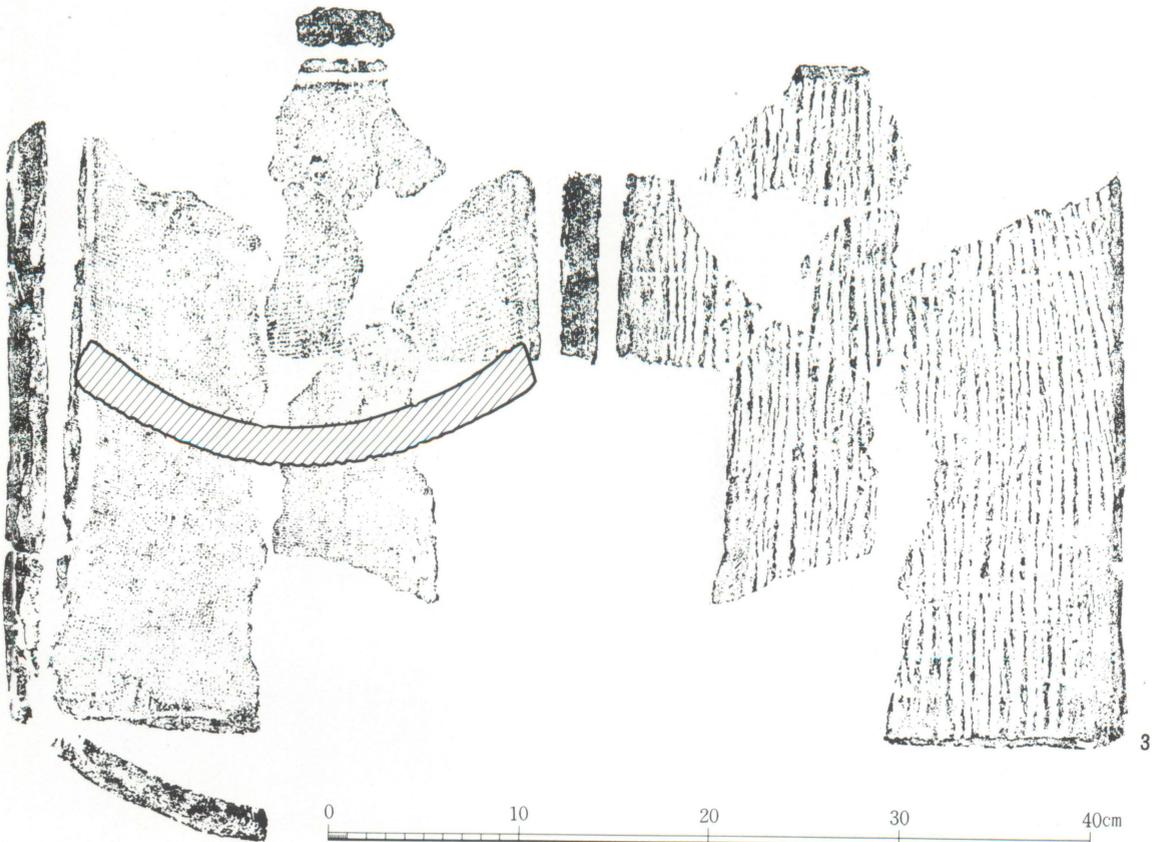
5



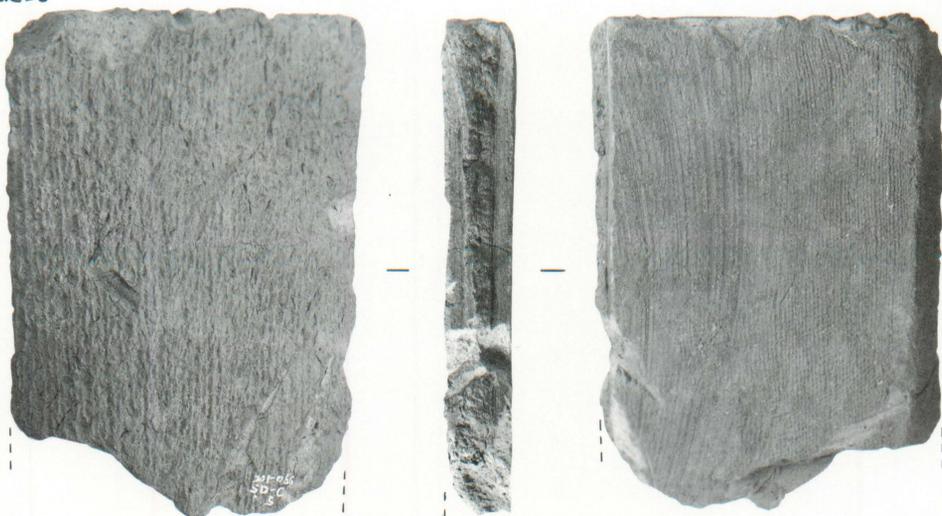
1:1



1 : 3



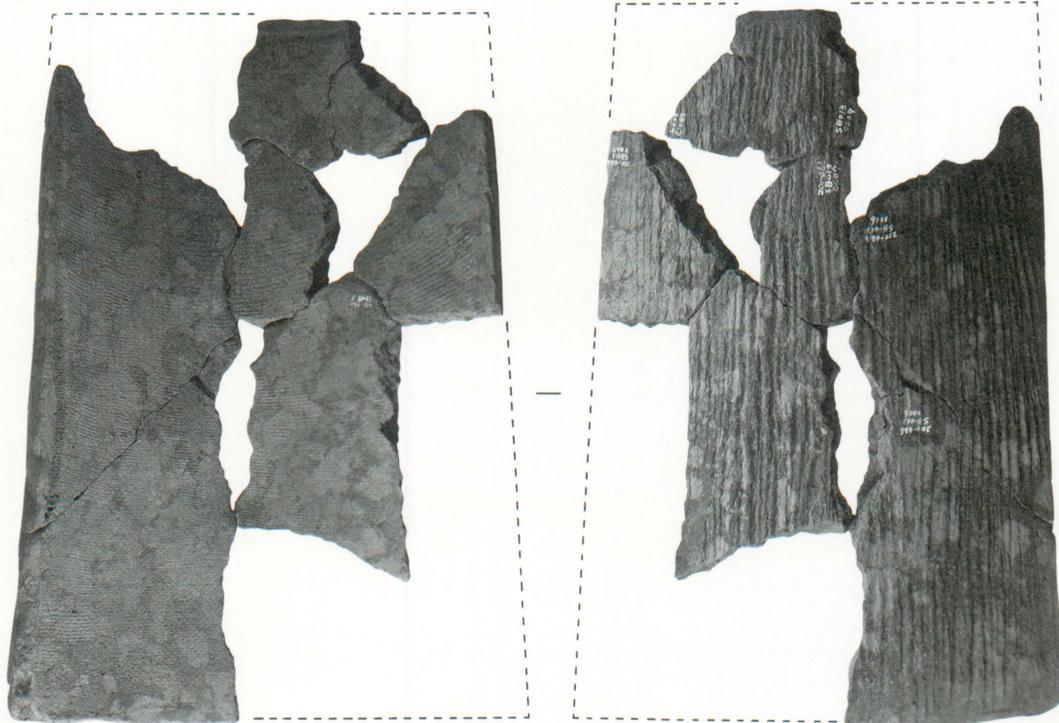
1 : 4



1:2.5

1

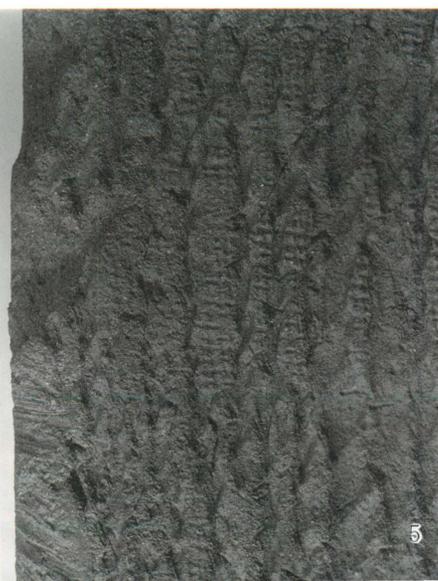
1:3



3



1:1





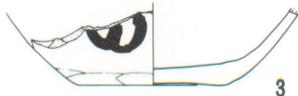
1



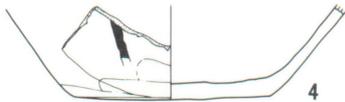
1 : 2



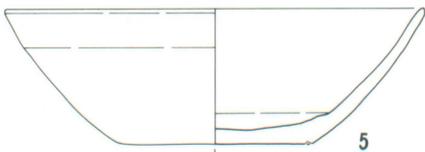
2



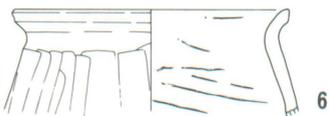
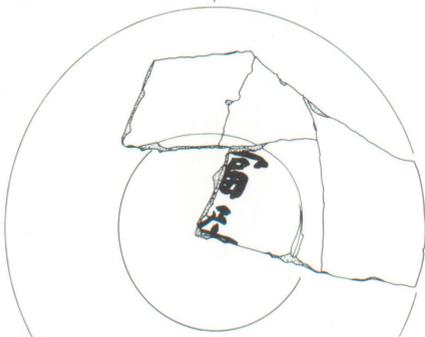
3



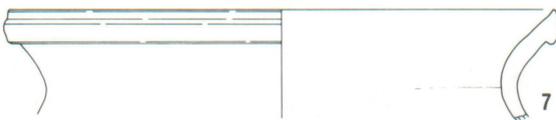
4



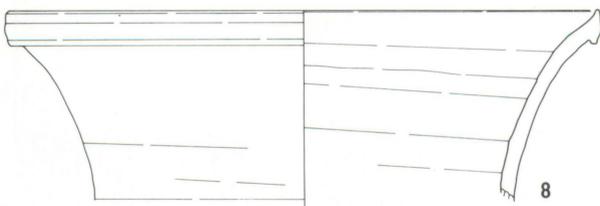
5



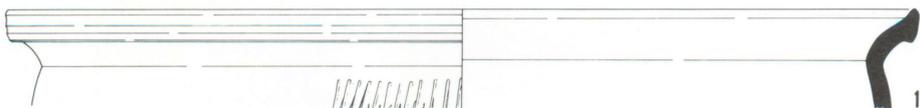
6



7



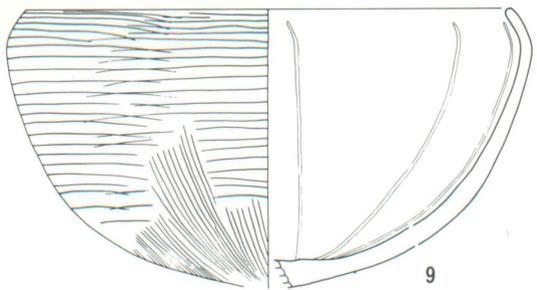
8



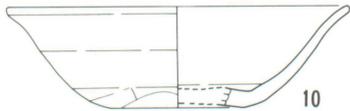
19



1 : 3



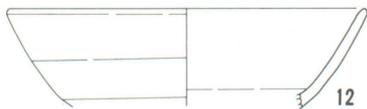
9



10



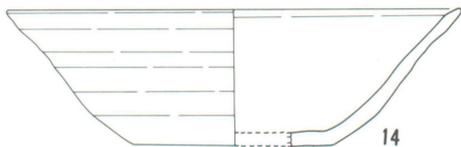
11



12



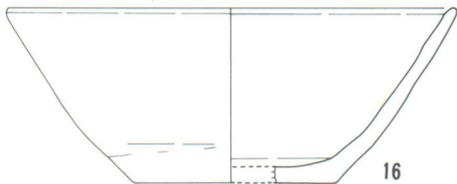
13



14



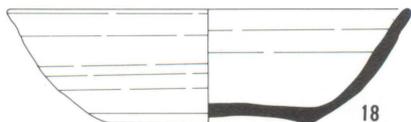
15



16



17



18



1



1:1

1



9



10



18



15



1:1

2

1:1 5



4



14



16

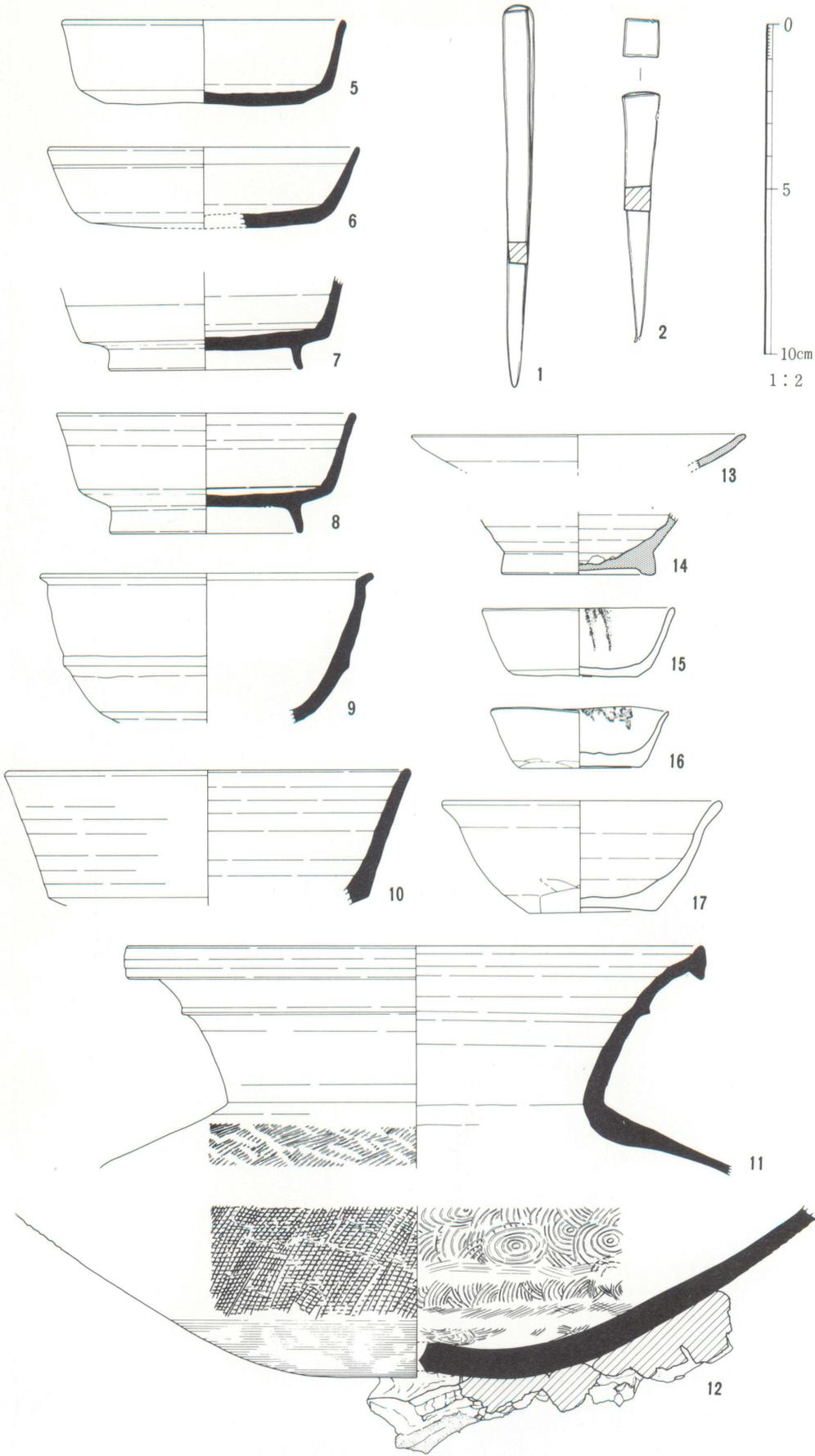


1:3

1:1



3



0 10 20 30cm

1 : 3



17

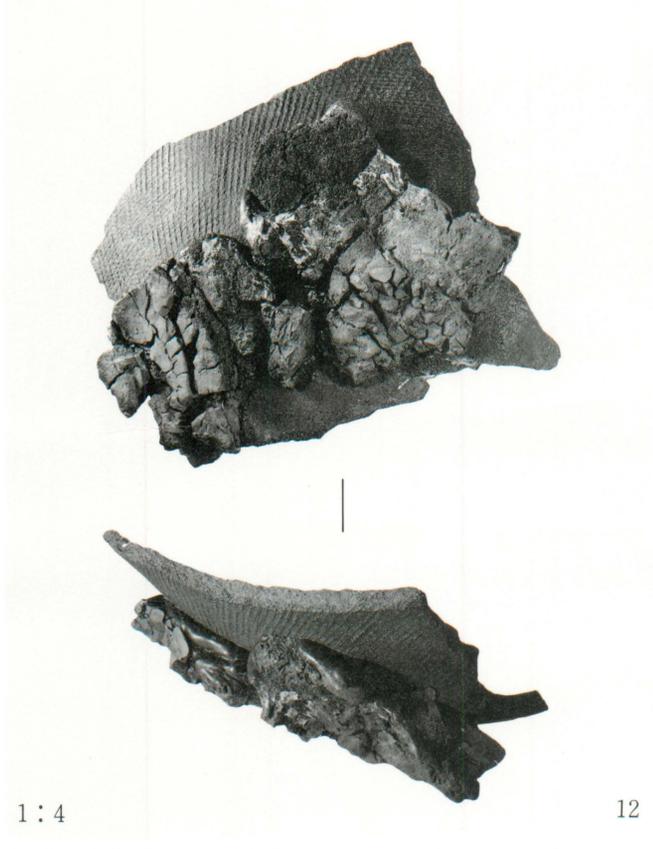
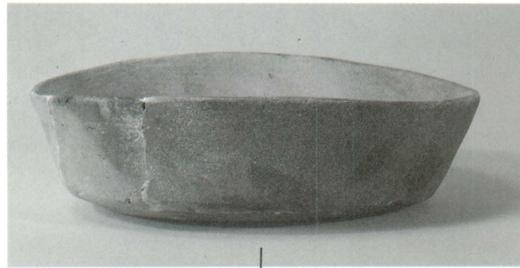


16

15



8

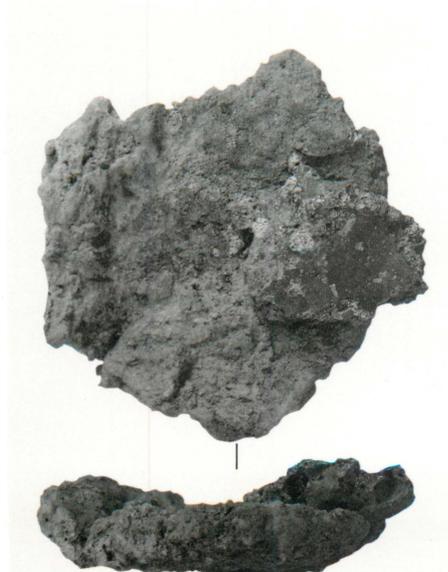


12



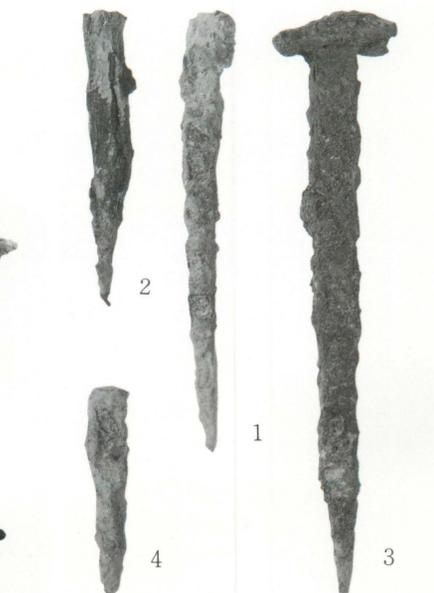
5

1:4



18

1:2



2

1

4

3

1:2.5

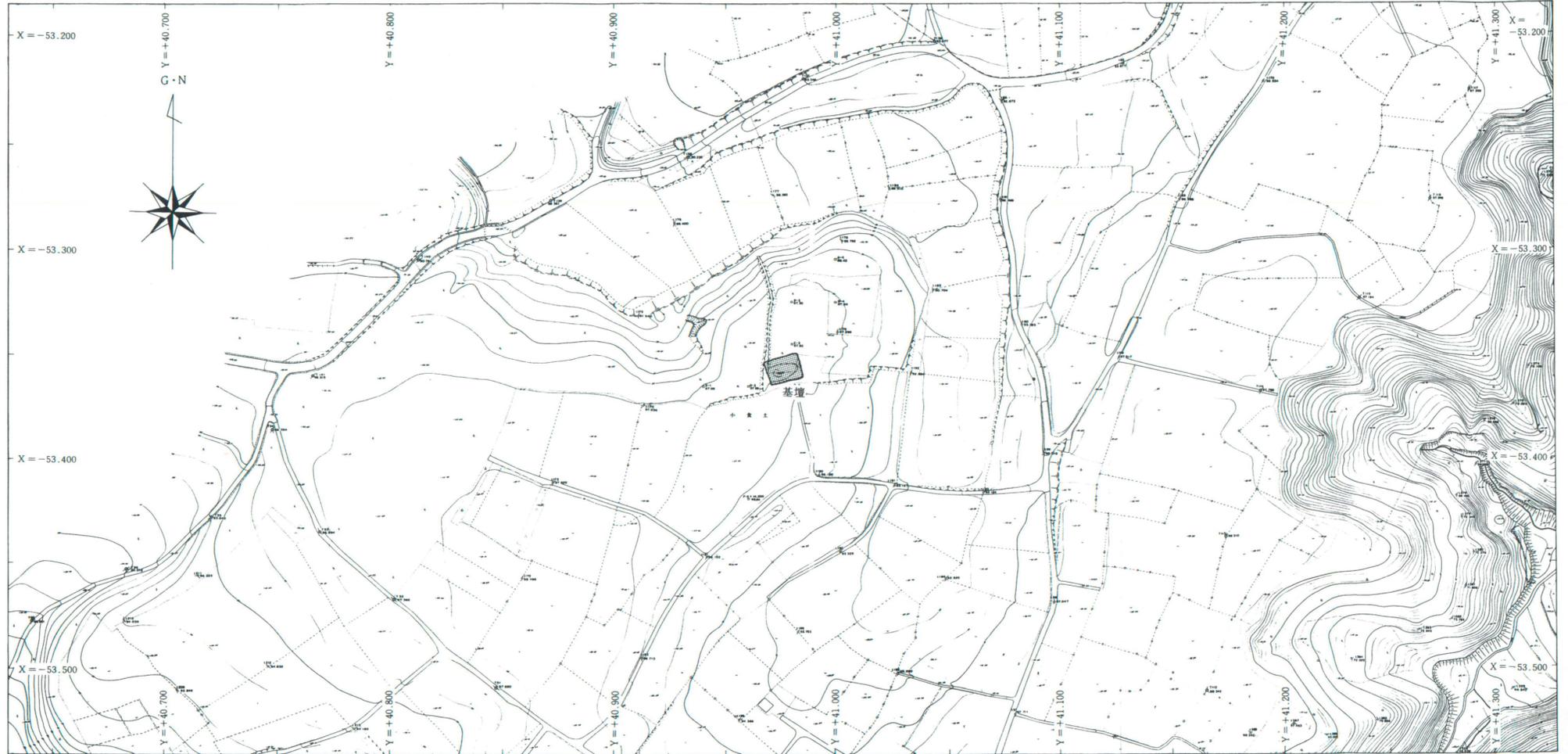
1:2

19

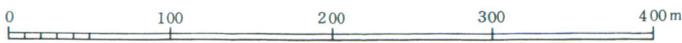
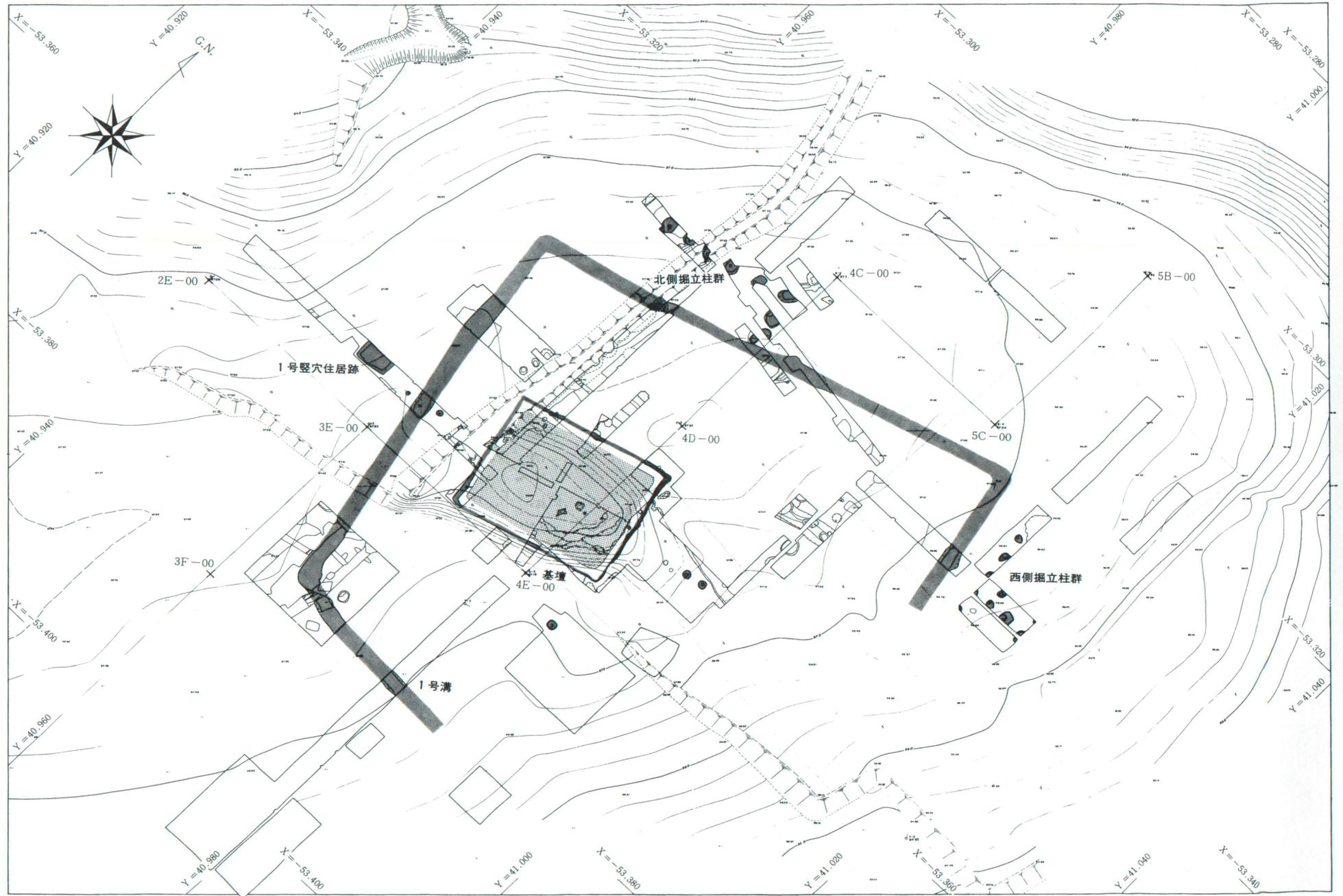
1:2

小食土麿寺跡周辺の地形測量図(昭和の森公園造成前)

PLAN 1



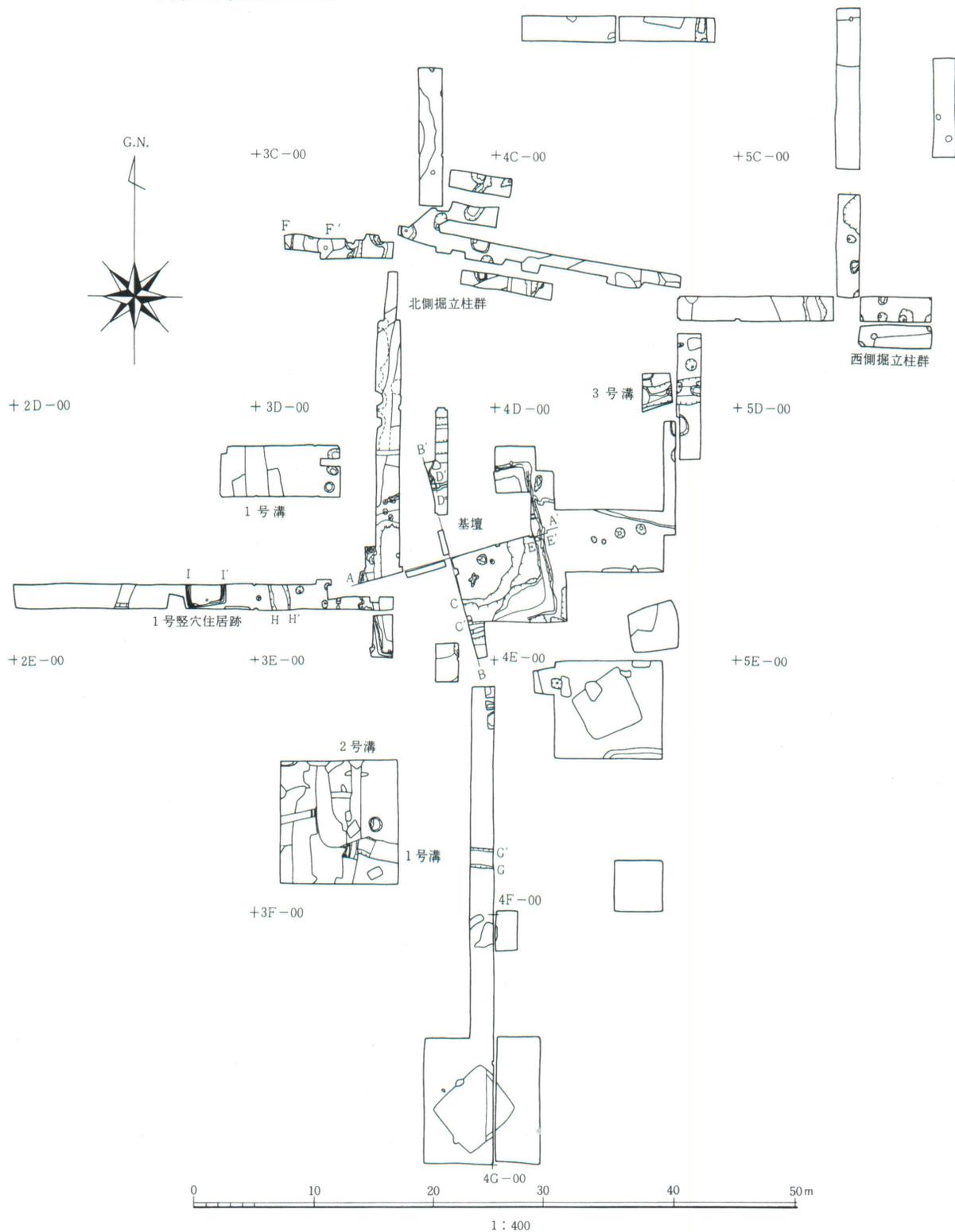
1 : 2000

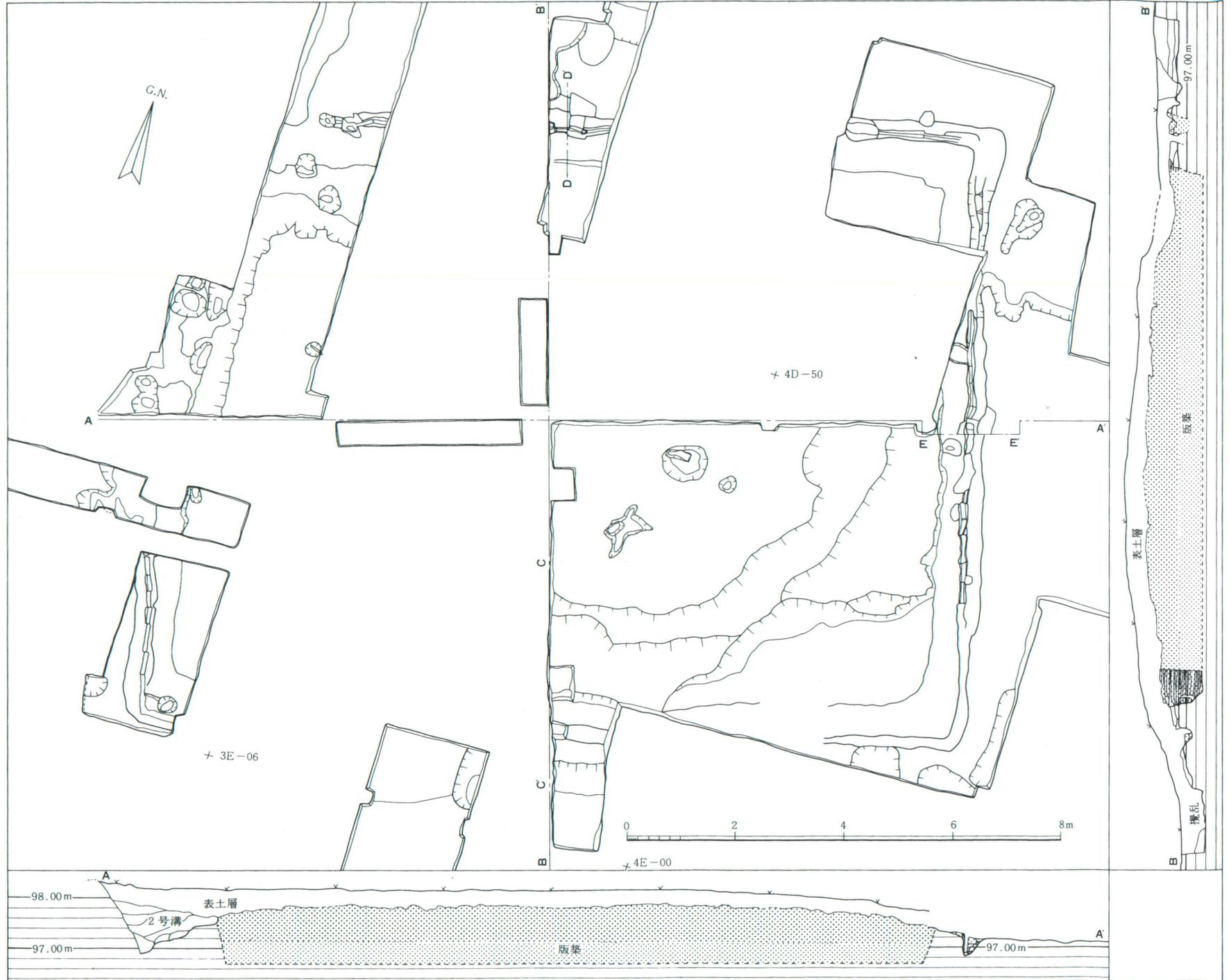


1 : 400

小食土麿寺跡遺構全体図

PLAN 3





千葉県小食土廃寺跡確認調査報告書

昭和61年3月31日発行

発行集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉県都町2丁目5番5号
